

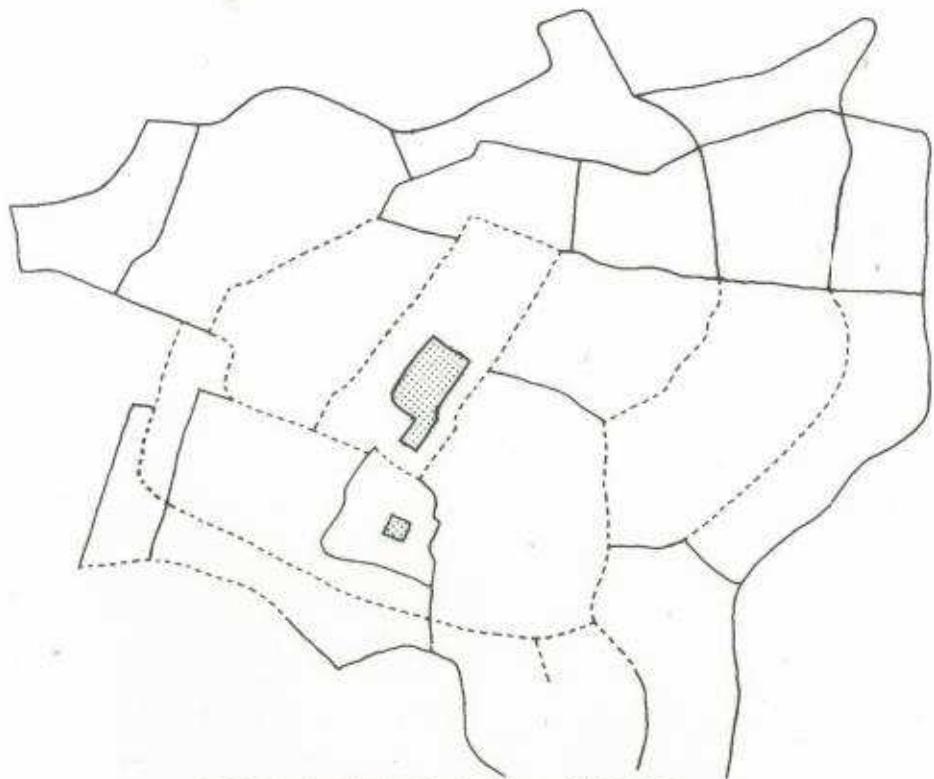
# 沖城跡

—市道田井原南北線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—



2000

諫早市教育委員会



現地形と旧地形（小字名）の対応関係  
(破線は写真中に見られる溝の痕跡・アミかけ部分は城跡と思われる区画)



旧地形で見た場合の調査位置  
(アミかけ部分は城跡と思われる区画)

空中写真による地形の比較 (S-1 / 10,000)



平成 4 年 撮影



昭和 22 年 撮影

## 発刊にあたって

長崎県の中央部に位置する諫早市は、古代官道や近世においては長崎街道が整備されるなど、交通の要衝としての地理的な特性を活かし、人びとの往来によりその歴史を刻んできました。

今回報告する沖城跡は本市の市街地に隣接し、平成9、10年度に発掘調査を実施した遺跡であります。調査の結果、中世から近世にかけての遺物、中でも国産磁器焼成以前の陶磁器が豊富に出土しました。また、城の存在を裏付ける溝状遺構や鋳造関連と思われる土壙群が検出され、周囲を溝で画し、生産施設を伴っていたという、城のより具体的な姿が確認されました。このことは、当地において資料に乏しいこの時期に関する新たな知見が、発掘調査という考古学の手法により得ることができたという意味において、大きな成果であると考えます。

今回得られました貴重な資料が本書とともに、今後の調査研究の一助として活用されるだけでなく、文化財保護への理解を深める契機となることを切に願う次第であります。

発刊にあたり、長期間にわたる発掘調査及び整理作業に従事していただきました皆様をはじめ、関係各位に賜りました深い御理解と多大なる御協力に対しまして、心より厚くお礼申し上げます。

平成12年3月

諫早市教育委員会  
教育長 立山 司

## 例　　言

1. 本書は、市道田井原南北線道路改良事業に先立って平成9・10年度に緊急調査を行なった沖城跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は諫早市土木部道路課の委託を受けて、諫早市教育委員会文化課が行なった。
3. 調査は平成9年度・平成10年度に行なった。調査期間については下記のとおりである。  
平成9年度 平成10年1月12日～3月31日  
平成10年度 平成10年12月2日～平成11年2月5日  
また、整理作業については平成11年度に行なった。
4. 調査は、諫早市教育委員会文化課主任（現在参事補）秀島貞康、事務職員川瀬雄一、埋蔵文化財調査員古賀力、橋本幸男が行なった。
5. 遺物の整理・実測・拓本と遺構・遺物のトレースは、秀島・川瀬・古賀・橋本が分担して行ない、渡辺三重子・平山裕子の協力を得た。
6. 本書の執筆は、第Ⅱ章を秀島・川瀬が、第Ⅲ章の1～3を秀島が、6のうち木簡を古賀が行なった。これ以外の部分の執筆、及び編集は川瀬が行なった。
7. 卷頭上段のカラー写真は、大成ジオテック（株）撮影（平成4年）の空中写真を掲載したものである。また、下段の白黒写真は米軍撮影（昭和22年）の空中写真を掲載したものである。
8. 木製品のうち下駄の一部については、（株）吉田生物研究所に委託し、高級アルコール法による保存を行なった。
9. 本書関係の出土遺物と図面及び写真類は、諫早市郷土館に保管している。
10. 第Ⅲ章の木製品のうち、下駄については川内知子氏（諫早市千拓資料館）の御教示、御協力を得た。

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡と調査の概要.....	1
第1節 遺跡の立地と環境.....	1
1. 遺跡の立地.....	1
2. 歴史的環境.....	2
第2節 調査の概要.....	4
1. 調査に至る経緯.....	4
2. 調査の方法.....	4
3. 基本的層位.....	6
第Ⅱ章 検出遺構と遺物の出土状況.....	9
第1節 溝状遺構.....	10
1. C-6 .....	10
2. A-8～C-9 .....	10
3. B-1～D-1 .....	12
4. B-5～D-4 .....	15
第2節 道路遺構.....	16
第3節 鋳造関連土壌群.....	16
1. B-1-A.....	16
2. B-1-B.....	19
3. B-1-C.....	19
4. B-1-D.....	20
5. B-1-E.....	23
6. B-1-F・G・H.....	23
第4節 廃棄壙.....	23
第5節 杖列.....	24
第6節 柱列.....	24
第Ⅲ章 遺物.....	30
1. 陶器.....	30
2. 磁器.....	34
3. 土師質土器.....	42
4. 瓦.....	44
5. 瓦質土器.....	48
6. 木製品.....	50
7. その他の遺物.....	56

8. 表採遺物	64
第IV章 まとめ	66

## 挿 図 目 次

第1図 古地図に見る沖城の位置（上段：諫早旧城下図、下段：大正15年測量図）	3
第2図 周辺遺跡分布図（S-1/25,000）	5
第3図 土層模式図	6
第4図 トレンチ配置図	7～8
第5図 C-6溝状遺構実測図（S-1/80）	11
第6図 A-8～C-9溝状遺構・道路遺構実測図（S-1/80）	13
第7図 B-1～D-1溝状遺構実測図（S-1/130）	15
第8図 B-5～D-4溝状遺構実測図（S-1/130）	15
第9図 B-1～D-1溝状遺構遺物出土状況図（S-1/40）	17～18
第10図 B-1铸造関連土壌群実測図（S-1/40）	21～22
第11図 B-1铸造関連土壌群遺物出土状況図（S-1/40）	25～26
第12図 D-2廃棄壙遺物出土状況図（S-1/40）	25～26
第13図 D-7杭列模式図（S-1/60・1/30）	27
第14図 D-2廃棄壙実測図（S-1/30）	27
第15図 B-3～B-4柱列実測図（S-1/40）	28
第16図 旧字図（仲沖名・船越名）	29
第17図 旧字図（城畠・大堀端・大沖道下）と出土遺構の位置関係	29
第18図 陶器実測図①（S-1/3）	31
第19図 陶器実測図②（S-1/3）	33
第20図 陶器実測図③（S-1/3）	36
第21図 磁器実測図①（S-1/3）	37
第22図 磁器実測図②（S-1/3）	39
第23図 土師質土器実測図（S-1/3）	43
第24図 瓦実測図①（S-1/4）	45
第25図 瓦実測図②（S-1/4）	47
第26図 瓦質土器実測図①（S-1/3）	49
第27図 瓦質土器実測図②（S-1/3）	51
第28図 木製品実測図①（S-1/3）	55
第29図 木製品実測図②（S-1/4・1/8）	57
第30図 木製品実測図③（S-1/4）	59

第31図	その他の遺物実測図① (S-1/2) .....	60
第32図	その他の遺物実測図② (S-1/3) .....	61
第33図	その他の遺物実測図③ (S-1/2・1/3) .....	62
第34図	表採遺物実測図 (S-1/4・1/8) .....	65

## 表 目 次

第1表	年表.....	2
第2表	周辺遺跡地名表.....	5
第3表	調査面積集計表.....	7～8
第4表	出土遺物集計表.....	9
第5表	陶器観察表.....	35
第6表	磁器観察表.....	41
第7表	土師質土器観察表.....	52
第8表	瓦観察表.....	52
第9表	瓦質土器観察表.....	52
第10表	木製品観察表.....	63
第11表	その他の遺物観察表①.....	63
第12表	その他の遺物観察表②.....	63

## 図 版 目 次

図版1	遺跡近景、C-6溝状遺構検出状況、A-8溝状遺構・道路遺構検出状況.....	72
図版2	C-9溝状遺構・道路遺構検出状況、B-1溝状遺構埋没状況、 B-1溝状遺構検出状況.....	73
図版3	B-5溝状遺構検出状況、D-4溝状遺構検出状況、 B-1鋳造関連土壌群全景.....	74
図版4	B-1鋳造関連土壌群全景、B-1-A遺物出土状況、B-1-A検出状況.....	75
図版5	B-1-B遺物出土状況、B-1-B検出状況①、B-1-B検出状況②.....	76
図版6	B-1-C覆土堆積状況、B-1-C検出状況①、B-1-C検出状況②.....	77
図版7	B-1-D検出状況、D-2廃棄壙検出状況、B-3～B-4柱列検出状況.....	78
図版8	D-7杭列検出状況、遺物出土状況①、遺物出土状況②.....	79
図版9	陶器、磁器、土師質土器.....	80
図版10	瓦、瓦質土器、木製品.....	81
図版11	木製品、その他の遺物、表採遺物.....	82

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	おきじょうあと							
書名	沖城跡							
副書名								
卷次								
シリーズ名	諫早市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	川瀬 雄一・秀島 貞康・古賀 力							
編集機関	諫早市教育委員会							
所在地	〒854-8601 長崎県諫早市東小路町7番1号 TEL 0957-22-1500							
発行年月日	西暦2000年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
沖城跡	長崎県 諫早市 仲沖町 幸町	42204	84-86	32度 50分	134度 30分	19980112～ 19980331  19981202～ 19990205	2,121m <sup>2</sup>	道路拡幅
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
沖城跡	城跡	中～近世	溝状遺構 道路遺構 鋳造関連土壙 杭列 柱列	陶磁器 土師質土器 瓦 瓦質土器 木製品		城を囲んでいたと思われる溝を確認。 また、鋳造関連と思われる遺構が出土した。		

# 第Ⅰ章 遺跡と調査の概要

## 第1節 遺跡の立地と環境

### 1. 遺跡の立地

沖城跡は諫早市仲沖町及び幸町の境界（大字では「仲沖名」と「船越名」との境界、小字では「城畠」、巻頭・第16、17図）に位置し、平成8年4月に移転・開校した市立諫早小学校の眼前にある。この地域は、県内唯一の一級河川である本明川と半造川とが合流する地点に位置する。現在、2つの河川は、合流したあと2kmほどで有明海へと達するが、慶長10年に描かれた『慶長肥前国絵図』では、それぞれの河川は別々に海へと注いでおり、城が立地している地域も、直に有明海とつながった岬状の突端部として描かれている。

「城畠」は、周囲を「二丁籠」、「佐馬祐籠」、「六佐衛門籠」といった、干拓にちなんだ「籠」地名に囲まれているが（巻頭・第16図）、これらはいずれも17世紀代の干拓地であると考えられており、沖城が築かれた当時の地形は現在とは大きく異なり、眼前には有明海が開けていたのであり、この地形的な要因を勘案し、城としての選地がなされたということが推測される。

次にこの地域をさらに細かく見ていくと、現在では一面が水田という平坦な地形であるが、これは昭和37年から41年にかけて行われた大規模な土地改良事業によるものである。現在では東西100mの間隔で長方形の水田が整然と配されているが、昭和22年4月に米軍が撮影した空中写真（巻頭下段）や字図（第17図）を見ると、事業実施以前は、当地は微高地をもつやや起伏のある地形であり、大小さまざまな形狀の水田や畑が混在し、半造川寄りでは地形的要因によるものかこれらが放射状に広がっていることや、幹線的な水路から枝別れした多くの小水路が走っていることがわかる。当地の小字名である「城畠」の中に鍵形の、「大沖道下」には正方形の区画があり、この周囲が溝（堀）で囲まれているという様子もわかる。「城畠」の鍵形の区画については大正15年測量の地図（第1図下段）にも記載されている。また眼鏡橋架橋（1839年）以前に描かれた『諫早旧城下図』には、水田の中に橢円形に囲まれた個所があり、樹木らしきものが描かれている。これをもとにして書かれた地図（第1図上段）の中では、この地点に「船越城」との記載がされているが、位置的に見て、今回調査を行なった「沖城」を示していると思われる。

以上のように、もともとこの地域は直に海に接していたことが推測される。また、土地改良事業以前の空中写真や地図類には、「城畠」や「大沖道下」の中に、周囲と区別しうるような一定の範囲が存在しており（第17図）、「城畠」に見られる鍵形の区画部分が「沖城跡」と考えられる。

## 2. 歴史的環境

もともとは高来郡西郷（南高来郡瑞穂町西郷）に起きた領主である西郷氏は、尚善の時にまず船越城（諫早農業高校付近）に入り、文明2（1470）年に高城を築き、領内にいくつかの支城を配したと言われる。沖城跡は、その支城の一つであり、「沖城（支城）仲沖町」後に家晴の隠居所となる。遺跡を城畠という。」との説がある（註1）。

しかし、この地で百年の治世を誇り、尚善・純久・純堯と三代にわたって繁栄した西郷氏も、純堯の子信尚が秀吉の島津征伐に参陣しなかったため、所領を召し上げられることとなる。後に沖城で隠居したと伝えられる龍造寺家晴は、島津討伐後の秀吉の「国割」に際し、居城である柳河城を含め、知行の安堵を受けなかったので、その代替地を要求した。これに対し秀吉は諫早2万2502石5斗を安堵した。しかし、西郷氏が居城の明け渡しに応じなかったので、家晴は天正15（1587）年に西郷信尚を攻め、高城を奪った。以上が、西郷氏の治世から、龍造寺氏が諫早へ入るまでのおおまかな経過である（第1表）。

沖城が作られたといわれる中世期に関しては、文書資料が極めて乏しいため、それを補う方法の一つとして、地形や字名から諫早の中世についての考察を試みようとした先学の研究がある。「城畠」に関しては「中世土豪の割拠状態を龍造寺氏入封以前に見るならば「城」字名の分布は、（中略）水田中に「城畠」なる四丁七反余畠地（中略）中世土豪の低地部進出をうかがわしめるが」（註2）との、また、「大堀端」については「土豪的地名では大堀端（船越の城畠に西接する）」（註3）との考察がなされている。「城」や「堀」地名に中世土豪の痕跡を見出そうとしたものであるが、これらが中世期に沖城が築かれたという説の論拠となっている。

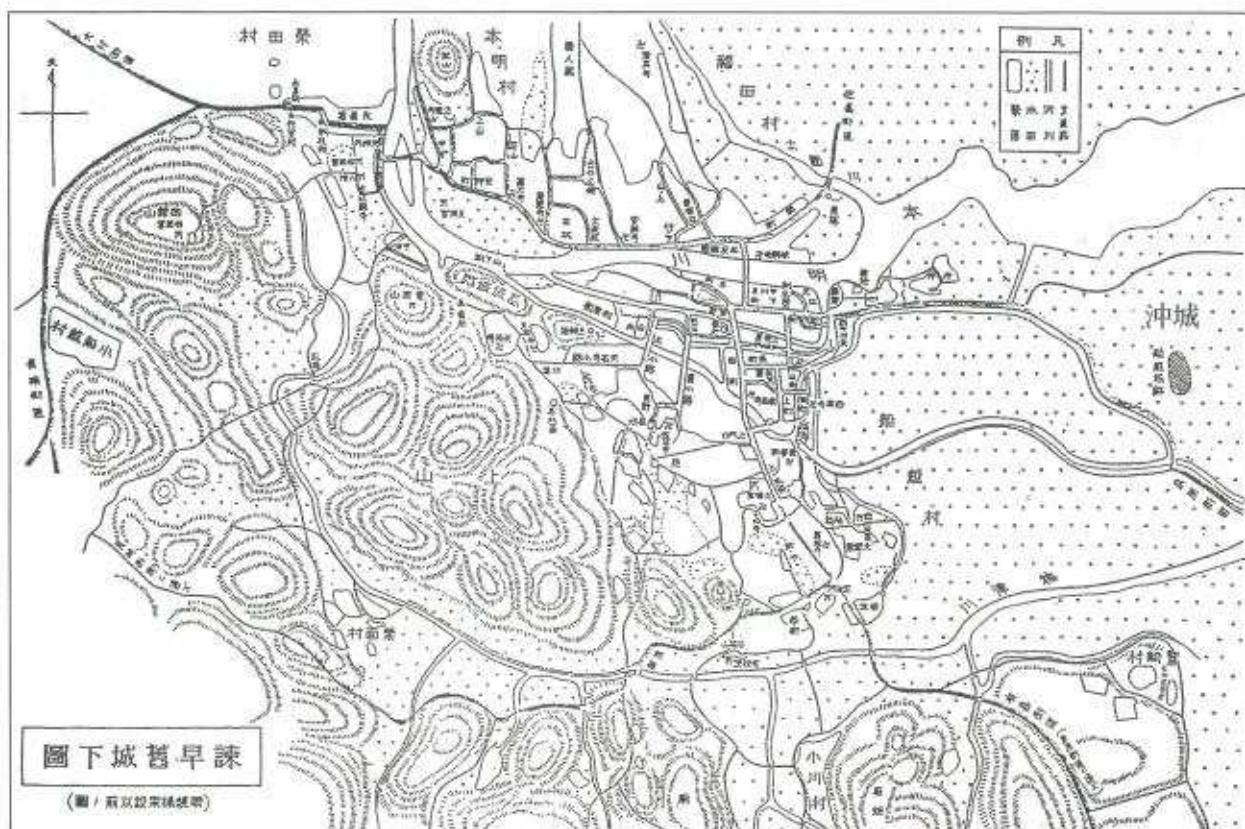
周辺の遺跡について見ていくと（第2図）、まず高城が挙げられる。周囲1km、標高50mほどの丘陵で、「城山」とも呼ばれる。現在では丘陵全域が、「城山暖地性樹叢」として国の天然記念物に指定されている。築造当時は「四方に高櫓を構え、多数の矢狭間があり、（中略）東に大手口、本門、桜馬場があった」という記録が残っている（註4）。大正時代から公園化されているが、朝鮮系中世瓦が採集され（註5）、土壘や空堀の痕跡をとどめているなど、現在でも城としての姿を残している。

諫早農業高校遺跡は本明川南岸の微高舌状台地にあり、明治39年の学校造成工事の際に発見され、32個の甕棺が出土したと伝えられているが、この中の一つから銅劍が出土している（註6）。船越城や船越駅などの遺跡もこの近隣に想定されている。

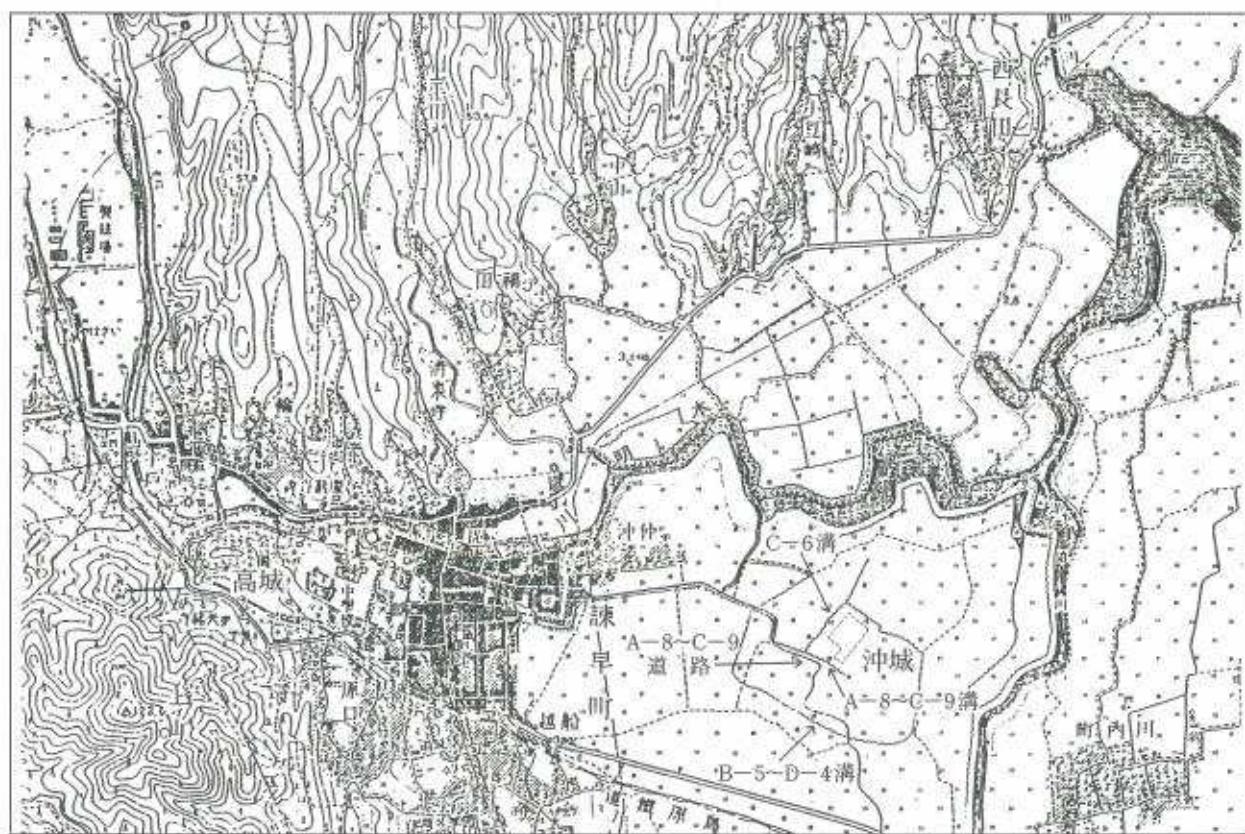
田井原条里遺跡は船越丘陵の裾部分にある。成立年代については判然としないが、出土した須恵器から、少なくとも8世紀後半以降であると想定される（註7）。この条里は船越駅に伴う駅田官給地と推測され、空中写真（巻頭下段）では1町四方

西暦	年号	事件
1470	文明2年	西郷尚善、高城を築城。
1578	天正6年	龍造寺隆信、諫早に進入。高城・宇木城陥落。純堯、小野城に退く。
1587	天正15年	龍造寺家晴、秀吉の命により、信尚の居城高城を攻略。純門、高城の奪還を図るも失敗、西郷氏滅亡。
1590	天正18年	家晴、秀吉より朱印状を下附される。
1592	文禄元年	家晴、朝鮮出兵のため津水港を出港（文禄の役）。
1598	慶長3年	再度、朝鮮出兵（慶長の役）。
1604	慶長9年	家晴、隠居。
1607	慶長12年	佐賀鍋島藩の成立。
1613	慶長18年	家晴没す。
1619	元和5年	直孝、諸役家老となり、諫早姓に改める。

第1表 年表



諫早旧城下図（諫早市史第1巻より）



大正15年測量図（国土地理院発行1/25,000地形図「諫早」を使用）

第1図 古地図に見る沖城の位置

が9区画ほどの短冊形の地割が認められる。

このように周辺には、水田という生産基盤を背景とする、各時代において中心的役割をもつ遺跡が散在しており、沖城が立地する地理的な要因についても首肯されるところである。

- 註1 諫早市役所 1955 「諫早市史第1巻」「第5編 中世」
- 註2 諫早市役所 1955 「諫早市史第2巻」「第13編 干拓」
- 註3 土肥利男 1965 『多良山麓研究』
- 註4 牟田五月男・山部 淳編 1975「西郷記」「諫江史料拾録」
- 註5 橋本幸男 1992「長崎県諫早市・大村市出土の朝鮮半島系中世瓦について」  
『古文化談叢第27集』(九州古文化研究会)
- 註6 正林謙 1971「諫早市出土の銅劍」「九州考古学N.o. 41~44」(九州考古学会)
- 註7 秀島貞康 1997「田井原条里遺跡発掘調査概報」(諫早市埋蔵文化財調査協議会)

## 第2節 調査の概要

### 1. 調査に至る経緯

当遺跡については、平成7年度に長崎県教育委員会が諫早南部5期地区農免農道整備事業に伴う緊急発掘調査を行なっている(註)。調査は、今回の調査対象である市道田井原南北線を中心とし、この東西にそれぞれ200mの総延長400m、面積にして2,000m<sup>2</sup>について行われた(第2図)。調査の成果としては、家晴の時期と矛盾しない年代(16世紀後半~17世紀初頭)を主体とする陶磁器などの遺物が多数出土したほか、石組遺構などが検出された。

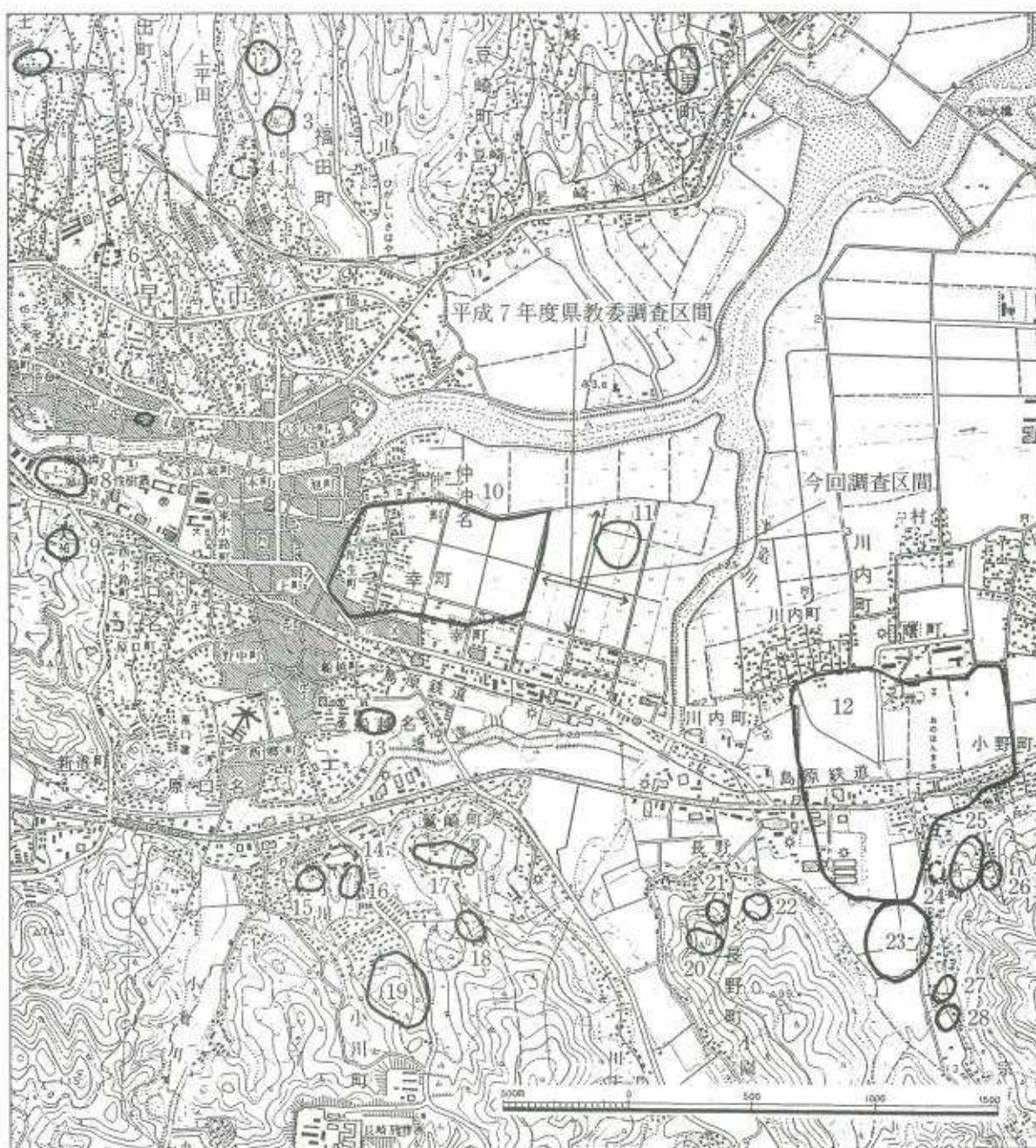
今回の道路改良事業が行なわれる区域も城跡の分布範囲であり、城の本体に近接することが各種の資料から十分に予測されたため、事業主体である諫早市土木部道路課と同教育委員会文化課が協議を行なった。その結果、遺跡の現状保存が困難であるとの結論に達したので、諫早市長名で文化財保護法第57条の規定による書類の提出がなされ、これを受け、諫早市長と諫早市教育長との間で調査委託に関する覚書を締結し、緊急発掘調査を行なうこととなった。

### 2. 調査の方法

市道田井原南北線道路改良事業の内容は、道路幅の拡幅であった。拡幅は市道の両側によよそ4m程度が計画されており、調査はこの拡幅部分について行なった。調査総面積は2,121m<sup>2</sup>である(第3表)。

トレンチの呼称については、市道田井原南北線と諫早南部5期地区農免道路の交点を基準とし、この北東部分をA区、南東部分をB区、北西部分をC区、南西部分をD区とし、それぞれ北側から南側へ向かってA-1、A-2…、B-1、B-2…、C-1、C-2…、D-1、D-2…とした(第4図)。基本的には土地一筆ごとに1トレンチを設定した。

遺物の取り上げについては、原位置をとどめていないと判断される個所では層ごとに行なった。また、遺構に伴うものであっても、後世の遺物の混入が顕著である場合も同じく一括して



第2図 周辺遺跡分布図（国土地理院発行1/25,000地形図「諫早」・「諫早南部」を使用）

番号	遺跡名称	種別	立地	時代	備考	番号	遺跡名称	種別	立地	時代	備考
1	折山頭遺跡	ク	丘陵			15	A地点遺跡	遺物包含地	丘陵	弥	
2	窟ノ谷遺跡	ク	"	弥		16	B地点遺跡	ク	"	弥	
3	中山遺跡	散布地	"	中・近		17	十仙平遺跡	ク	"	繩	
4	中平田遺跡	遺物包含地	舌状台地	弥	消滅	18	源内谷遺跡	ク	"	繩	
5	西里遺跡	ク	丘陵	繩・弥		19	小栗C地点遺跡	ク	"	弥	
6	金谷遺跡	ク	"		消滅	20	崎田遺跡	ク	"	弥	
7	金谷遺跡	石造物	平地	中・近		21	尾野大久保遺跡	ク	"	繩	
8	高城跡	城跡	丘陵	中		22	下組遺跡	ク	"	繩	
9	諫早家墓所	墳墓	平野	近		23	宗方筒井遺跡	貝塚	平野	繩・弥	
10	田井原条里遺跡	条里遺構	ク	中		24	小野古墳	古墳	丘陵	古	消滅
11	沖城跡	城跡	ク	中・近		25	宮崎館遺跡	遺物包含地	ク	先・古・中	
12	小野条里遺跡	条里遺構	ク	中		26	小野城跡	城跡	ク	中	
13	諫早農業高校遺跡	墳墓	丘陵	弥・古		27	水の手遺跡	遺物包含地	ク	古	
14	小栗B遺跡	ク	"	弥	消滅	28	太郎丸遺跡	ク	平野	弥	

第2表 周辺遺跡地名表

取り上げを行なった。B-1～D-1 溝状遺構・B-1 鋳造関連土壌群、D-2 廃棄壙に関しては、同時期の遺物が堆積しているため、現地でそれぞれ番号を付して取り上げを行ない、調査現場において10分の1で図化した（次章に掲載）。

なお、今回の調査を行なうにあたっては下記の資料を参考にした。

- ① 諫早旧城下図（第1図上段）
- ② 大日本帝国陸地測量部による大正15年測量地図（第1図下段）
- ③ 旧字図（第16・17図、諫早市郷土館所有）
- ④ 平成4年撮影の空中写真（巻頭上段）

※水分の影響によるものか、溝が埋没した際の埋土が周囲と異なる色調を見せ、線状の痕跡として、⑤の溝と同じ位置・同じ方向で、この中に看取される（巻頭上段破線部分）。

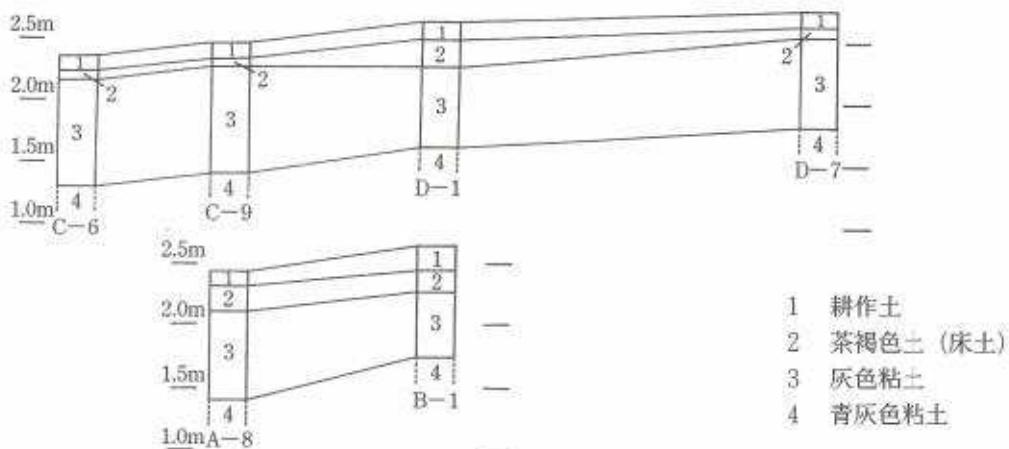
- ⑤ 昭和22年に米軍が撮影した空中写真（巻頭下段）
- ⑥ ③に伴う土地台帳（明治22年の地価修正時のもの・諫早市財務部契約管財課所有）

### 3. 基本的層位（第3図）

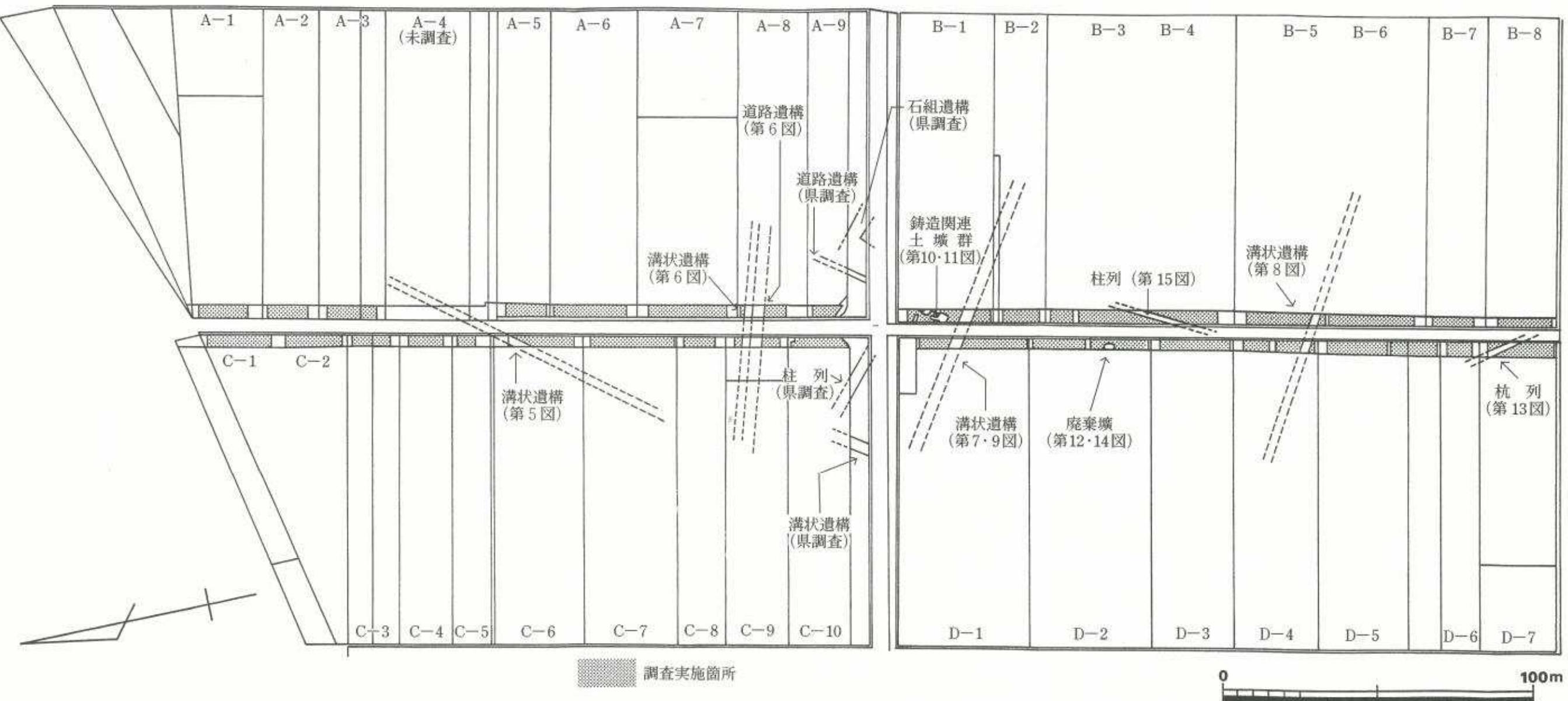
調査対象範囲の水田面は、南端（D-7）で標高2.75m、北端（A-1）で標高2.2mであり、現地形は南側から北側へ向かって傾斜している。

層位は、1層—耕作土、2層—黄褐色土（床土）、3層—灰色粘土層である。遺物は3層まで含まれ、溝状遺構などの遺構面もこの層にある。層厚はおよそ50～80cmで、水分を含んだやや軟弱な層である。4層は青灰色を呈する還元度の強い潟土である。この層に至ると無遺物となり、自然貝層が認められる。この層の上面は水田面下90cm～1mで表出し（標高は1.4～1.9m）、南側から北側へ向かって緩やかに傾斜している。この4層は一般に有明粘土と呼称されるもので、調査地と新倉屋敷川を挟んで対岸に位置する、諫早小学校建設地のボーリング調査では9～12mの堆積が認められた。

註 高野晋司ほか 1998 「沖城跡」（長崎県文化財調査報告書第143集 長崎県教育委員会）



第3図 土層模式図



第4図 ト レ ン チ 配 置 図

トレンチ名	町 名	地番	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査年度
A-1	仲沖町	116-2	64	平成9年度
A-2	仲沖町	117	42	平成9年度
A-3	仲沖町	118	24	平成9年度
A-4	仲沖町	119	24	平成9年度
		120	0	未 調 査
A-5	仲沖町	121	0	未 調 査
		122	0	未 調 査
A-6	仲沖町	123	39	平成9年度
A-7	仲沖町	124	72	平成9年度
A-8	仲沖町	125-1	78	平成9年度
A-9	仲沖町	126	60	平成9年度
小計			27	平成9年度
			430	

トレンチ名	町 名	地番	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査年度
B-1	幸 町	177	108	平成10年度
B-2	幸 町	178	21	平成9年度
B-3	幸 町	179	21	平成9年度
B-4	幸 町	180	128	平成9年度
B-5	幸 町	181	72	平成9年度
B-6	幸 町	181	84	平成9年度
B-7	幸 町	182	39	平成9年度
B-8	幸 町	183	54	平成9年度
小計			611	

トレンチ名	町 名	地番	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査年度
C-1	仲沖町	248-1	84	平成9年度
C-2	仲沖町	248-1	72	平成9年度
C-3	仲沖町	248-2	18	平成9年度
C-4	仲沖町	247	18	平成9年度
C-5	仲沖町	246	33	平成9年度
C-6	仲沖町	245	18	平成9年度
C-7	仲沖町	244	63	平成9年度
C-8	仲沖町	243	78	平成10年度
C-9	仲沖町	241-1	45	平成9年度
C-10	仲沖町	240-1	53	平成10年度
小計			527	

トレンチ名	町 名	地番	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査年度
D-1	幸 町	219-1	105	平成10年度
D-2	幸 町	219-2	114	平成10年度
D-3	幸 町	217	46	平成9年度
D-4	幸 町	216	48	平成9年度
D-5	幸 町	215	60	平成9年度
D-6	幸 町	214	60	平成9年度
D-7	幸 町	213	32	平成9年度
小計			553	平成10年度
			527	
			2,121	

第3表 調 査 面 積 集 計 表

## 第Ⅱ章 検出遺構と遺物の出土状況

今回の調査において、合計8,429点の遺物が出土した（第4表）。割合としては、陶器が全体の26%と最も多く、次いで磁器・瓦がともに17%を占めている。低湿地に立地していること、溝状遺構が検出されたことから、木製品も多く、14%を占めている。この他には土師質土器・瓦質土器・石製品・金属製品が見られる。中世末～近世初頭に属するものが主体であるが、弥生土器・土師器・石鍋・青磁などの時期を溯る遺物も少ないながら出土しており、当地が古くから土地利用されていたということが充分に推測しうる。地点ごとの数量については第4表のとおりであるが、D区で21.7%と最も多く、次いでB・C区に多出する傾向がある。このことは「土地改良事業が行なわれる前にA区の東側にあった高まり（鍵形の区画・城跡と思われる）が、事業により削平され、生じた土砂が南東方向（D区）へ搬出された。」という地権者の話とも一致している。

本章では、今回の調査で検出された遺構についての説明に加え、各遺構ごとの出土遺物の概要について記述する。なお、各遺構の検出位置及び遺構の位置関係については第4・17図を、文中的小字名については巻頭・第16、17図を参照していただきたい。また、出土遺物の詳細に関しては次章を参照していただきたい。

溝状遺構分

トレンチ名	周 長	幅 間	前丸	軒平	瓦	木	石	瓦質土器	土 菌	金銀製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角類)	粘 土	ビニール	其
A-1	81	36	1	2	15	265	1	8	3	—	2	434	5	11	5	5	375	
B-1	31	26	1	2	12	124	1	43	10	—	3	53	40	—	34	2	329	
B-2	29	26	1	2	12	124	1	—	—	—	—	22	—	1	—	—	30	
C-1	29	26	1	2	12	124	1	—	—	—	—	205	—	—	—	—	29	
C-2	29	26	1	2	12	124	1	—	—	—	—	205	—	—	—	—	29	
D-1	28	17	1	2	12	124	1	10	5	—	—	32	—	—	—	—	186	
D-2	28	8	1	2	12	124	1	—	—	—	—	44	—	2	—	—	66	
計	148	120	1	3	86	288	1	80	422	38	31	1,125	93	40	41	2	18	3,293

土器分

遺構名	周 長	幅 間	前丸	軒平	瓦	木	石	瓦質土器	土 菌	金銀製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角類)	粘 土	其	
B-1-A	22	6	—	—	6	1	—	8	8	—	—	4	1	4	—	40	—	
B-1-B	25	6	—	—	6	1	—	8	8	—	—	38	1	5	—	71	—	
B-1-C	25	11	—	—	16	4	—	37	8	—	—	45	12	1	—	18	154	
B-1-D	24	11	—	—	16	4	—	37	8	—	—	45	12	1	—	18	8	
B-1-E	24	8	—	—	5	4	3	—	—	—	—	2	—	—	—	—	5	
B-1-F	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
B-1-G	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
B-1-H	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
B-1-I	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
B-1-J	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	
計	148	120	1	3	86	288	1	80	422	38	31	1,125	93	40	41	2	18	3,293

遺取上分

トレンチ名	周 長	幅 間	前丸	軒平	瓦	木	石	瓦質土器	土 菌	金銀製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角類)	粘 土	其	
A-1	33	15	1	2	25	—	—	8	8	—	—	—	—	—	—	—	23	
A-2	33	6	—	—	1	2	—	4	1	—	—	—	—	—	—	—	21	
A-3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	
A-4	3	3	—	—	1	8	—	37	1	—	—	—	—	—	—	—	45	
A-5	25	12	1	1	12	25	—	4	30	8	—	—	—	—	—	—	154	
A-6	25	10	2	2	12	25	—	5	3	—	—	—	—	—	—	—	30	
A-7	25	12	1	1	12	25	—	6	41	15	—	—	—	—	—	—	451	
A-8	25	12	1	1	12	25	—	7	37	10	—	—	—	—	—	—	265	
A-9	25	12	1	1	12	25	—	8	37	10	—	—	—	—	—	—	25	
A-10	25	12	1	1	12	25	—	9	37	10	—	—	—	—	—	—	25	
A-11	25	12	1	1	12	25	—	10	37	10	—	—	—	—	—	—	25	
計	225	120	4	3	102	366	0	86	115	32	12	9	4	2	5	0	1,039	
B-1	21	2	1	1	12	38	—	20	20	—	—	2	—	—	—	—	525	
B-2	21	25	—	—	8	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25	
B-3	21	25	—	—	8	26	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	25	
B-4	21	41	—	—	2	35	—	14	35	8	—	—	—	—	—	—	201	
B-5	15	36	—	—	2	35	—	22	35	8	—	—	—	—	—	—	235	
B-6	28	11	—	—	2	35	—	22	35	8	—	—	—	—	—	—	90	
B-7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	
B-8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	
B-9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	
B-10	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	
B-11	663	216	2	3	22	117	0	146	465	4	15	9	3	0	0	12	0	1,127
C-1	31	38	1	7	27	5	11	2	1	—	—	—	—	—	—	—	35	
C-2	32	44	—	—	2	21	—	8	12	—	—	—	—	—	—	—	115	
C-3	29	25	—	—	2	22	—	8	12	—	—	—	—	—	—	—	55	
C-4	21	31	2	18	—	8	—	6	—	—	—	—	—	—	—	—	21	
C-5	28	20	—	—	9	38	—	1	22	2	—	—	—	—	—	—	355	
C-6	31	66	—	—	14	23	—	1	18	5	—	—	—	—	—	—	265	
C-7	20	27	1	1	6	4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	66	
C-8	20	28	—	—	14	23	—	4	35	8	—	—	—	—	—	—	230	
C-9	25	32	—	—	22	35	—	4	35	8	—	—	—	—	—	—	38	
C-10	454	266	5	31	27	299	0	86	163	33	1	0	7	3	17	0	1,386	
D-1	133	45	—	—	22	61	—	8	28	5	1	—	—	—	—	—	357	
D-2	133	47	—	—	27	25	—	8	28	5	1	—	—	—	—	—	460	
D-3	75	67	—	—	11	31	—	9	22	2	1	—	—	—	—	—	355	
D-4	105	70	—	—	3	27	—	9	22	2	1	—	—	—	—	—	354	
D-5	135	80	—	—	4	29	—	2	28	2	1	—	—	—	—	—	355	
D-6	132	80	—	—	3	27	—	4	28	2	1	—	—	—	—	—	352	
D-7	81	80	—	—	3	8	—	4	27	3	—	—	—	—	—	—	351	
D-8	728	470	0	3	24	320	0	85	286	25	7	0	13	6	—	—	1,739	
計	2,069	1,267	1	18	356	812	0	351	851	62	35	0	22	14	28	2	3,413	

全体集計表

出土箇所	周 長	幅 間	前丸	軒平	瓦	木	石	瓦質土器	土 菌	金銀製品	植物遺存体	木製品	石製品	ガラス	動物遺存体 (含骨角類)	粘 土	ビニール	其
溝状遺構分	160	390	1	2	15	265	1	86	223	85	12	1,025	18	45	2	38	2,269	
土器分	38	25	1	4	301	2	27	48	3	—	—	—	—	—	—	—	38	
遺取上分	2,050	1,267	11	18	356	812	0	351	851	62	35	—	—	—	—	—	5,613	
計	2,118	1,428	12	22	329	1,261	1	356	1,261	82	35	1,220	108	54	2	38	5,613	

第4表 出土遺物集計表

## 第1節 溝状遺構

### 1. C-6 (第5図・図版1)

城跡の西側に位置し、流路の方角はN-43°-Eである。現地表面から40cmで検出され、検出面ではレンガや現代の瓦、20~30cmほどの河原石が散見された。標高は上面1.9m・下面1.1mを測る。上面幅2.7m・下面幅1.6m・深さ80cmで、断面は逆台形である。延長線がA-4の方へ続くと思われるが、A-4については今回未調査である。覆土は底面から20cmほど黒色の粘質土が堆積しており、水が溜まっていた痕跡を示す。この溝から東側へ向かって伸びる2条の浅い溝は、導水路としての役割が考えられる。

小字名での「城畠」と「大沖」とを画す溝であり、城の西限を示すと思われる。この溝はさらに南北に伸びていき、総延長は200mほどと思われる。空中写真や字図を見ると、北端では現在の倉屋敷川付近で東側へほぼ直角に方向を変える。南端ではC-9でおよそ東側へ70°向きを変え、A-8~C-9で検出された溝へと繋がる。

#### 出土遺物

4層からは青花、白磁の輸入陶器のほか、唐津系端反皿、京風陶器などが11点ほど検出されている。ただビニールの包装紙や現代の磁器も含まれており、昭和37~41年にかけての土地改良事業時にも溝として機能していたものと思われ、前記遺物が埋没・包含されたのであろう。

青花、白磁の輸入陶器のほか、唐津系端反皿などがこの溝が埋没した時期を示すと思われ、B-1~D-1溝状遺構と同時期である。

### 2. A-8~C-9 (第6図・図版1、2)

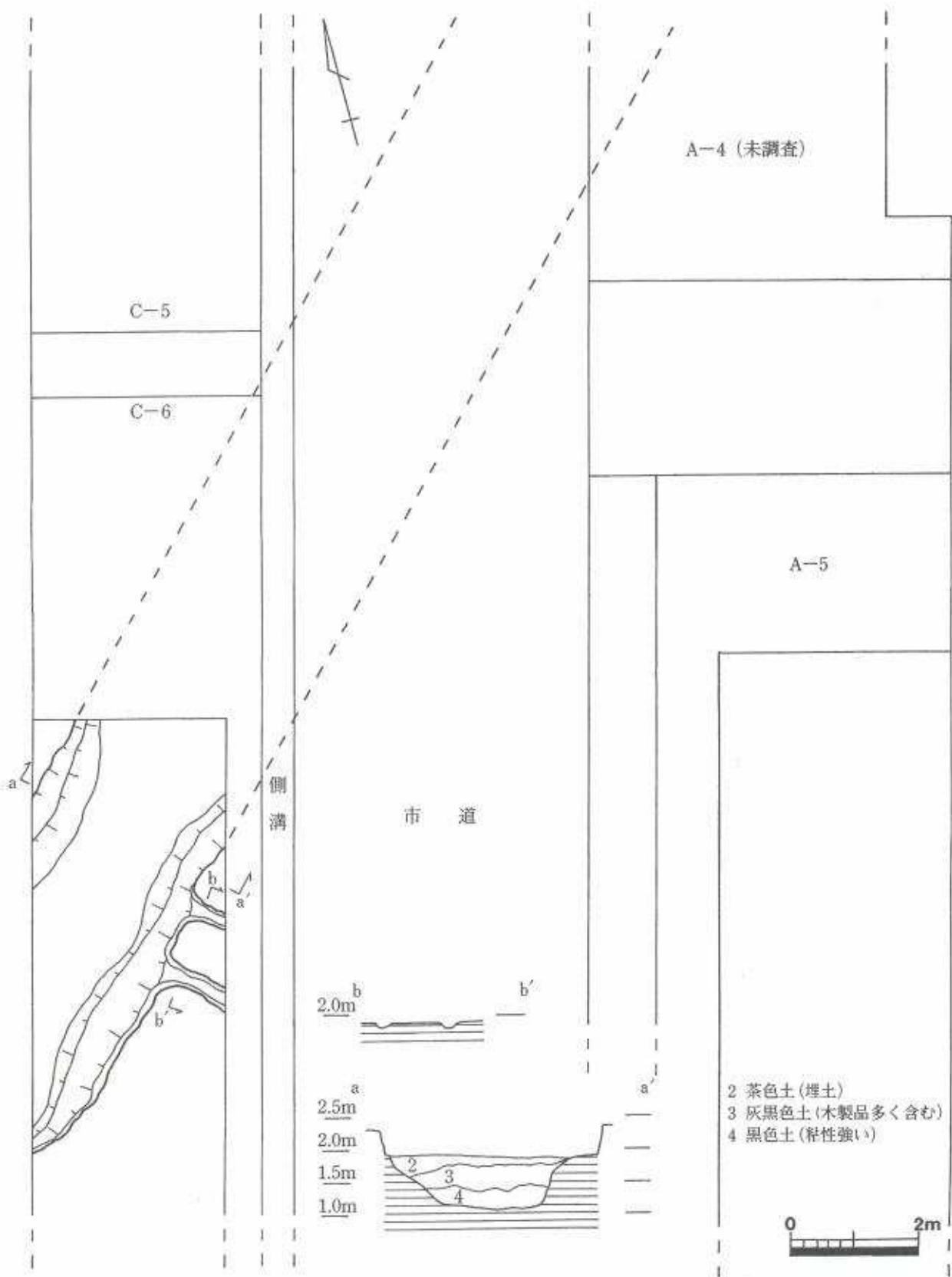
現道を挟んで東西に検出された。流路の方角はN-75°-Wである。南側にはこの溝に沿って道路状の硬化面がある。

A-8溝は、現地表面から30cmで検出され、標高は上面2.1m・下面1.3mを測る。上面幅2.4m・下面幅1.8m・深さ80cmで、断面は逆台形である。溝の肩の部分には直径6~10cmを主とする杭と、これに渡すように横木が配されている。C-9溝の検出面及び深さはA-8溝と同じであるが上面幅2m・下面幅1.4mと幅がやや狭い。覆土はC-6溝と同様の黒色の粘質土が、A-8溝で40cm、C-9溝で50cm堆積している。水が溜まっていた痕跡を示すと思われ、また新旧の遺物が混在、埋土にはガラスやビニール袋などが含まれているという状況から、C-6溝と同じく、土地改良時に埋没したものと思われる。

小字名での「城畠」と「大堀端」とを画すもので、C-6溝との交点からの延長は150mほどである。

#### 出土遺物

C-6溝と同じく新旧の遺物が混在している。木製品が豊富で、黒漆蓋(第28図7)、鬼歯(第29図15)、杓子(同19~21)が出土している。また、「平戸産 枝栄造」と転写された三



第5図 C-6 溝状邊構実測図 (S-1/80)

川内焼の小碗（第22図36）も出土している。

### 3. B-1～D-1（第7、9図・図版2）

現道を挟んで東西に検出された。流路の方角はN-53°-Wである。B-1溝は現地表面から30cmで検出、標高は上面2.4m、下面1.7m。上面幅は4m・下面幅3.1m・深さ70cmで、断面は皿状を呈する。D-1溝の標高は上面2.4m・下面1.9m。上下幅はB-1溝と同じであるが、深さ50cmとやや浅い。他の溝状遺構の最下層にある黒色の粘質土がないことや、新しい遺物の出土がないことから、他の溝よりも前に埋められたと考えられる。B-1溝の北側肩部には、廃材あるいは屋根材と思われる木材が積み上げられている。今回検出した溝の中で最大の幅を有する。B-1溝の北側で、鋳造関連の遺構が出土している。

#### 出土遺物（B-1溝）

遺物の総数は第4表のとおり625点である。陶磁器は国産陶器と輸入磁器で占められ、肥前磁器を含まない時期の共伴・埋没関係を示している。その他、瓦、瓦器、鉄滓、金属器、錢貨、木製品、砥石、骨、粘土が含まれる。

##### ①青花碗or小鉢

全体像を窺い知る資料に乏しいが、25（第22図）は森毅（註1）の「碗Ⅵ類」、加藤有重（註2）の「小鉢A-1」かと思われる。26（同図）は口縁部を輪花型に成形し、内面唐草風の陽刻文を型打ちし、外面波涛文と飛馬文を染付ける。

##### ②青花皿

1、4、5（第21図）は大形の鍔皿で、森分類で精製の「大皿Ⅱa類」と粗製の「大皿Ⅱb類」、森分類「皿F群」の両様が見られる。9、10（第22図）は輪花型皿で如意頭文を型打ち陽刻し、見込に菊・蝶文などを染付ける。14（同図）は有高台の小形の端反り皿で、森の「皿Ⅱa類」、小野正敏（註3）の「皿B1群」である。このほかには全形を知り得ないが、見込に圈線を引き中央に花卉文風の文様を染付けるもの（見込部は饅頭心風に盛り上がり、高台内はほぼ水平である。高台置付は焼成後釉薬を搔きとる。森「皿Ⅲa類」）、粗製の陶胎染付で外面圈線、内面胴部に染付を施すもの（森「皿Ⅲb類」、小野「皿E群」）、崩れた四方擗文を口縁内面に染付け、有高台の小形皿で口縁部が内湾するもの（森「皿Ⅲb類」）がある。

##### ③白磁

皿で高台を内傾させ置付に施釉しないもの（第22図34）や碗、小碗がある。

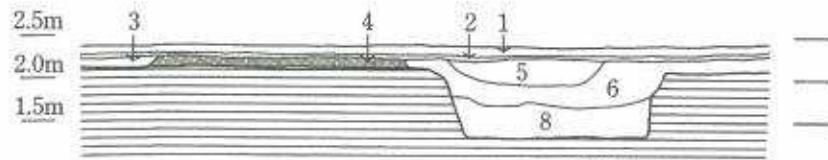
##### ④陶器

唐津製品が殆どで、僅かに志野風の碗（第18図8）が見られる。また、唐津製品は、絵唐津向付（同図12、13）、丸縁皿（同図14（皮鯨手）、19）、折縁皿（同図20）があり、初期の様相を見せる。また、袋物も叩き成形によっており、壺口縁（第19図27）なども古相を示す。

##### ⑤土師質土器

皿b類（分類については次章参照）を除いて全てのタイプのものが出土しており、I b、

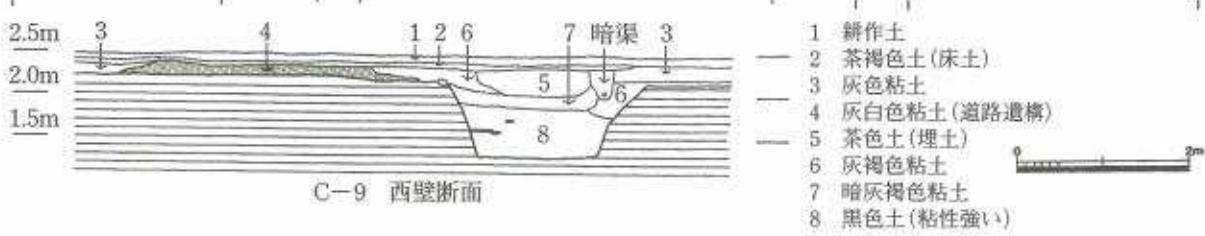
- 1 耕作土
- 2 茶褐色土(床土)
- 3 灰色粘土
- 4 灰白色粘土(道路)
- 5 茶色土(埋土)
- 6 灰褐色粘土
- 8 黑色土(粘性強い)



A-8 西壁断面



A-8 杭列



第6図 A-8～C-9溝状遺構・道路遺構実測図 (S-1/80)

II b 類の出自の系統からは III b 類も伴う可能性があるものである。

#### ⑥ 瓦質土器

大振りの資料が多く、火鉢(第26図4)と鍋(第27図8、9)が見られる。火鉢は三つ足で口縁部を L 字状に折り曲げ、口縁部外面に三つ巴丸文を密に押印している。8、9は丸底になるもので、口縁部を外面方に肥厚させ、鉄の把手をこの部位に取りつけたと思われる。そのため口縁部の一部の外面～口唇～内面に鉄錆が遺存している。

#### ⑦ 木製品

64点の出土を見た。木簡(第28図10、11)、下駄、板鍬や黒漆杯(同図1、2)・茶漆杯(同図3)・黒漆椀(同図5)、しゃもじ、曲物などの什器類、屋根下地材と思われる幅10cm、長さ60cm内外のスギ(?)薄板や木屑、糸車材などがある。

#### ⑧ 石製品

40点の出土を見たが、製品として扱えるものは砾石(第32図28)があるほかは、砂岩の被熱を受けた資料が多い。鍛冶に関連する遺物と考える。

#### ⑨ 動物・植物遺存体

正式な同定を経ていないので詳報はできないが、イヌ、イノシシ、トリ、サカナの食用動物のほか、ヒトの脊椎骨と思われる資料が1点存在する。また、食用植物としてクルミ、モモ、ウリ、チャンチンモドキの種子が出土している。

### 出土遺物(D-1溝)

遺物の総数は186点を数える。本来B-1溝に繋がるものであり、陶磁器は国産陶器と輸入磁器で占められる。ほかに、瓦、瓦器、木製品、石製品などがある。

B-1溝との出土遺物の相違点を挙げると、

#### ① 青花

森の「碗V a 類」で、外面体部に草花文を染付け、口唇部外方を上葉を厚く掛け玉縁風に作り、直下に圈線を全周させるもの(第22図22)。この手法は白磁(同図30)と同技法である。

#### ② 白磁

30の技法について青花に同様である。

#### ③ 陶器

ほぼ同巧・同大の丸縁皿が3枚(第18図21～23)出土し、窯詰め方法は胎土目詰みであり、1580～1610年代と思われる。唐津系と思われる鉄釉を掛けた茶陶を意識した天目碗(同図9)が共伴している。

#### ④ 土師質土器

III d 類と近似する底部糸きり離しの皿があるが、成形技法・器壁の厚さから同一工人の作とは見がたく、在地で模倣したものかと思われる。

#### ⑤ 木製品

生活用品としての壺や桶、玩具であろうか独楽型木製品が出土した。

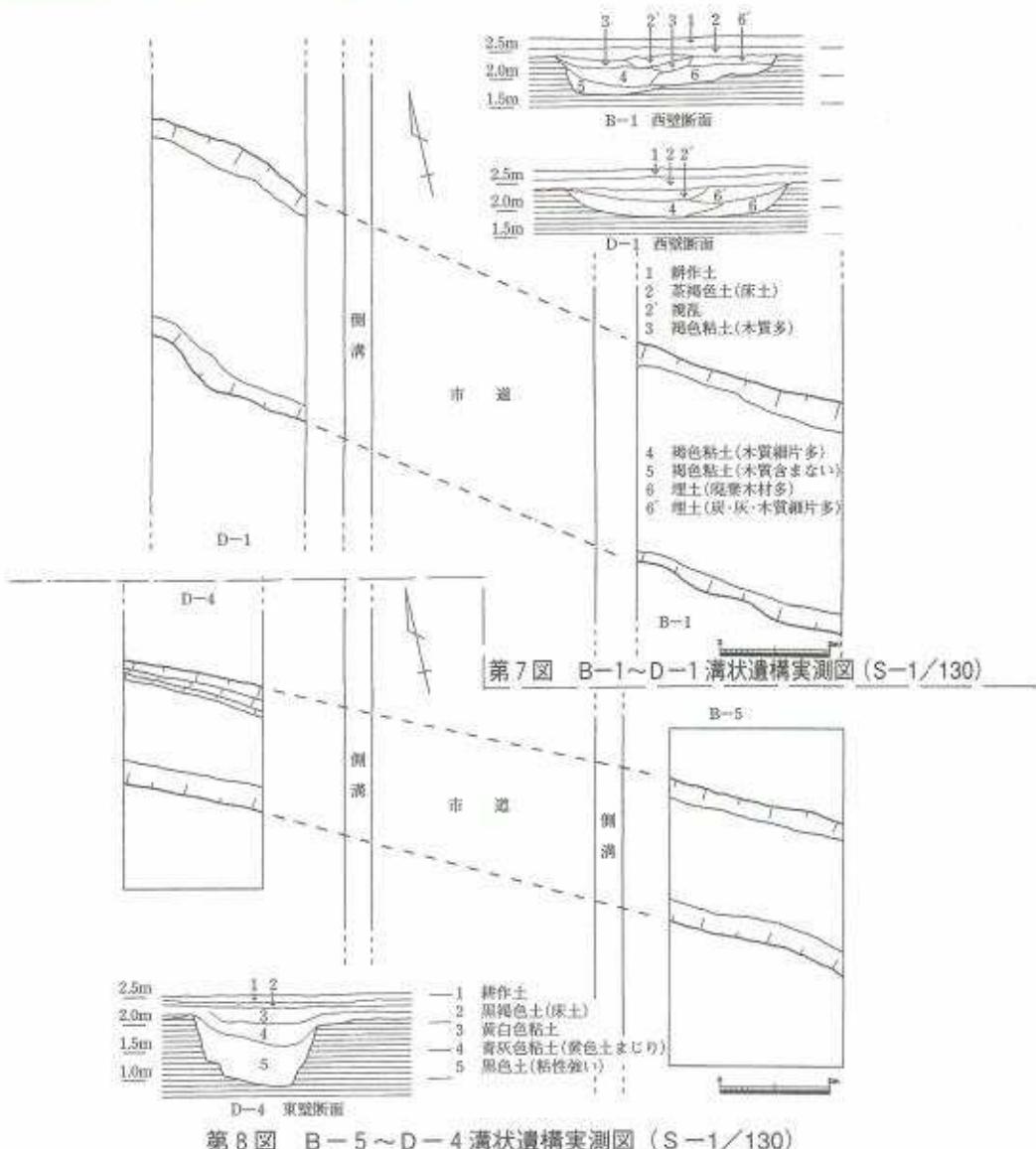
#### 4. B-5～D-4（第8図・図版3）

現道を挟んで東西に検出された。流路の方角はN-65°-Wである。B-5溝は、崩落の恐れがあったため、断面図は作製できなかった。上面幅2.5m・下面幅1.8mで、断面は逆台形を呈する。D-4溝は現地表面から30cmほどで検出し、標高は上面2.2m・下面90cmである。B-5溝よりも幅がやや狭く、上面幅2.2m・下面幅1.3mである。深さは今回の調査で検出された溝の中で最も深く、1.3mを測る。断面は同じく逆台形を呈する。D-4溝では底面から70cmほど黒色の粘質土が堆積しており、水が溜まっていた痕跡を示す。

この溝は通称「百間堀」と呼ばれる。この溝はさらに東西に伸び、西側では北へと流路を変え、「大井樋」へつながる。東側では同じく北へ流路を変え、半造川へと注いでいる。

#### 出土遺物

遺物の出土状況に関してはC-6溝やA-8～C-9溝と同様に新旧の遺物が混在しており、土地改良時に埋没したものと思われる。



第8図 B-5～D-4溝状遺構実測図 (S-1/130)

## 第2節 道路遺構（第6図・図版1、2）

A-8～C-9で検出された。溝の肩のレベルから10cmほど高く、溝に添って走る。A-8では上面幅2.45m・下面幅2.7m、C-9では上面幅2.45m・下面幅3.5mである。また、厚みは15cm程度とA-8より若干厚い。

空中写真や第1図の中で、市街地から「大沖道下」と「大堀端」との境を通って角度を変えながら南下する道路（島原街道との記載あり）があり、位置から見て、この道路に対応すると思われる。

## 第3節 鋳造関連土壙群（第10、11図・図版3～7）

B-1において土壙状の遺構が数基確認された。出土遺物（砥石や粘土塊・砂）及び形状から鋳造関連遺構とその周囲にこれに伴う廃棄壙であると考えられ、「鋳造関連土壙群」とした。名称については、トレーナー名にさらにA、B…と枝番を付して、B-1-A、B-1-B…と呼称する。

### 1. B-1-A

B-1の西側に接して検出した。西側は道路の下に延長する。主軸はN-56°Wで、平面形は細長い舌状を呈する。幅60cm、長さは確認部分で2.7mである。断面形は壁がやや立った皿状を呈し、深さは30cmほどである。覆土は、青灰粘土が混じる黒色の砂質土が床面から10cmほど堆積している。この上におがくず状の茶色土が薄い層を成して見られる。

遺構内で柱が1本検出された（柱①）。直径10cm・長さ55cmほどで、形状は六角形である。遺構外でも、北側でぬきあとが2個所（柱②、③）、南側で直径10cm・長さ35cmほどの柱が1本出土した（柱④）いずれも掘り方は見られず、それぞれの柱及びぬきとの配置に関する規格性も認められない。

#### 出土遺物

46点出土し、陶磁器では国産陶器と輸入磁器があり、国産磁器使用以前の所産である。ほかに、自然遺物として食した後の魚の骨が見受けられた。

##### ①青花

稜花型碗と陶胎粗製の皿と思われる細片がある。

##### ②陶器

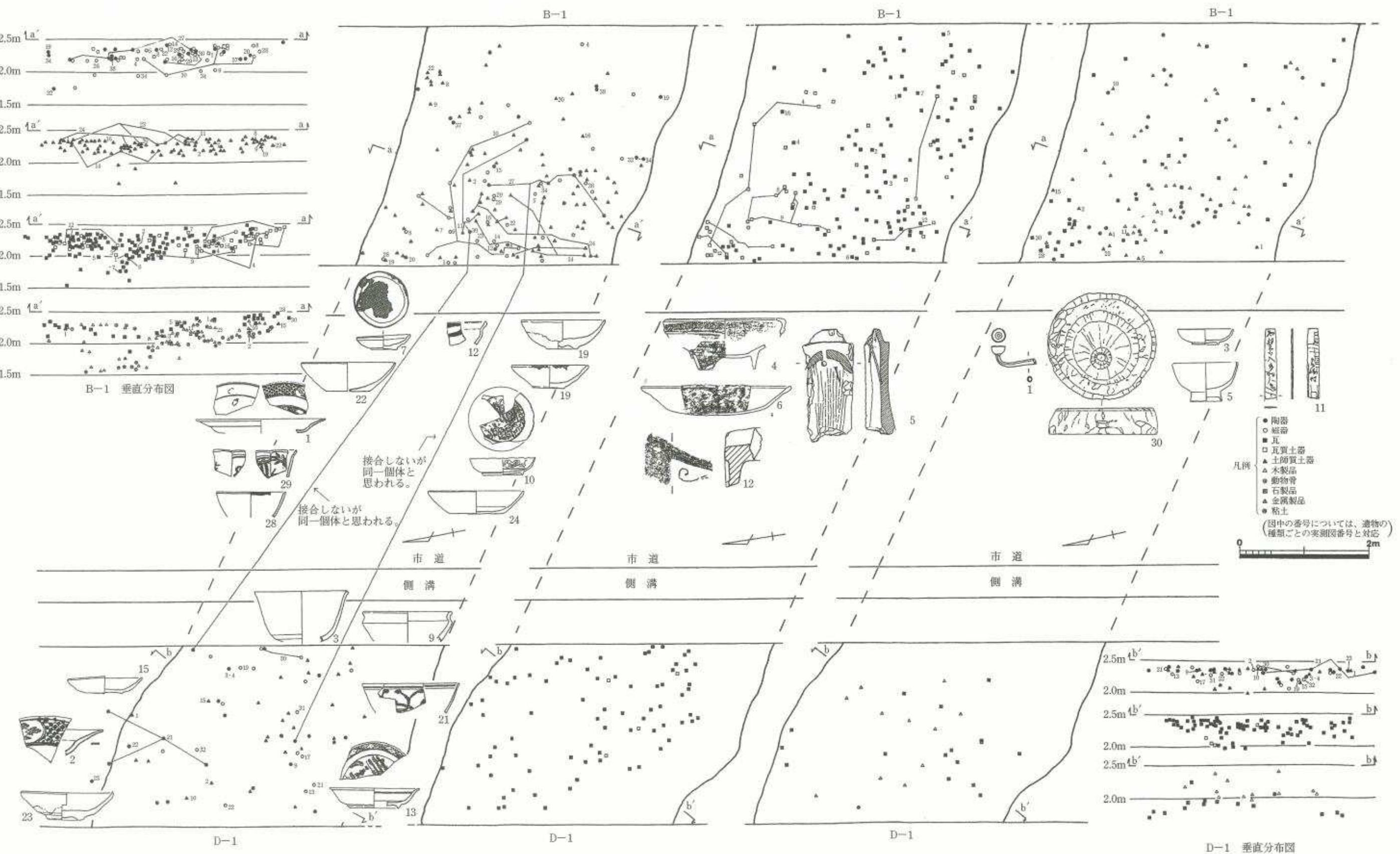
壺、こね鉢などが見られるが、壺（第19図36）は口縁部T字型のシャープな作りで、重ね焼きのための貝目を置いている。またこね鉢（第20図42）は口縁内側を肥厚させ、体部との境に段をもうけている。

##### ③土師質土器

II a、III b類（第23図21）の資料が見られる。

##### ④瓦質土器

第26図4（B-1溝出土）を二回りほど大きくした同形・同巧の火鉢（第26図5）が出土している。



第9図 B-1～D-1溝状遺構遺物出土状況図  
(S-1/40、同一地点のドットマップを遺物の種類ごとに振り分けたもの)

## ⑤木製品

スギ板を素材にした破魔矢矢羽根様の資料がある。

## 2. B-1-B

B-1の東側に接して検出した。平面形は全長3mほどの隅丸方形。東側が調査区外に及んでおり、全容を知りえないため、主軸ははっきりしないが、前述したB-1-Aと直交ないし直交に近い方位にある。南側の壁はやや立ち気味で、深さは40cmほどである。覆土はB-1-Aと同様であるが、黒色土がやや厚く20cmほど堆積している。後述のB-1-Dを切り、B-1-Eに切られているが、遺物から見てそれぞれの間に時期差は認められない。

### 出土遺物

71点出土し、国産陶器、輸入磁器、瓦、瓦器、木製品などがあり、B-1-Aなどと同一時期の所産である。

#### ①青花

饅頭心碗(第22図24)のほか型式不分明の青花碗がある。

#### ②陶器

同一固体の破片である灰釉多筋壺(第19図29)がある。

#### ③土師質土器

I a(第23図3)、I b、III c類があり、III c類は23と同様の施文具が見込から口縁内部にはねた痕跡を残す。

#### ④金属器

「く」の字に折れた方3mmほどの角釘と思われる資料が出土している。

#### ⑤木製品

下駄(第30図29)、木筒、椀、建築材などが出土している。

#### ⑥動物・植物遺存体

シカと思われる獸骨片やヒトのほか、ウメ・モモ種子が出土している。

## 3. B-1-C

B-1の西側に接して検出した。南端は一部調査区外に及んでいる。北側に向かって2.7m(深さ20cm)ほどの舌状の突き出しを有するが、基本的には3mほどの隅丸方形を呈する。南側は10cmとごく浅いが、北側の落ち込み部は40cmを測る。

覆土はB-1-A・Bで見られる茶色土のみが堆積している。覆土内には、生産関連の遺構であることを窺わせるように、粘土や灰のほか、輪の羽口や鉄滓が見られる。また、この部分は平面形1.8m×3mの規模であるが、遺構内に2本(柱⑧、⑨・1本は抜きあと)、遺構外に接して2本の柱が検出された(柱⑤、⑥)。柱は直径10~14cm、長さ50~60cmで、先端部は鋭利に加工している。軟弱な地盤であり、上から押し込むことが可能であると思われるため、掘り方

は見られない。これらは、それぞれが1.5~1.6m間隔で立っており、正方形のプランを有する。遺構の外部にも柱が1本あるが(柱⑦)、それぞれの柱が等間隔で配置されていることから見て、覆屋的な簡易な構造物が存在していたと思われる。

#### 出土遺物

遺物総数154点と、B-1検出の遺構内における遺物数は最も多い。

##### ①青花

森分類「碗Ⅰ類」の饅頭心碗(第22図23)、陶胎粗製の染付皿(同図20)、森分類「皿Ⅲa類」、團花纹風の丸文を見込にもつ小碗(同図27)がある。この小碗はB-1溝(同図28)でも確認され、またB-3調査区Ⅲ層から同意匠の皿(低い三角高台で外面から斜めに釉薬を搔く)が確認されている。

##### ②白磁

稜花型縁なぶりの皿型(?)が認められる。

##### ③陶器

体部と腰部を稜線で画する唐津碗(第18図1)と、胎土に黒の細粒子を含む乾質感のある皿型で外面灰緑釉、内面濃緑色のもち手がやや軽いものがある。器表に空気の発泡孔が看取される。

##### ④土師質土器

I a(第23図4~6、外に5片)、I b(1点)、II b(同図17、外に3点)、III b類が認められる。

##### ⑤金属

極薄の鏡かと思われる丸縁・円形の資料や鉄滓がある。

##### ⑥木製品

40点の出土があり、墨書木簡(第28図12~14)、下駄(第30図28)、漆塗りの椀、膳などの什器のほか、種子、建築部材(?)が見られる。

##### ⑦石製品

輪の羽口や壇場の台であろうか被熱した立方体の砂岩塊や、内削りした軽石、黒い小転石を利用した碁石(第31図22)が出土している。

##### ⑧粘土

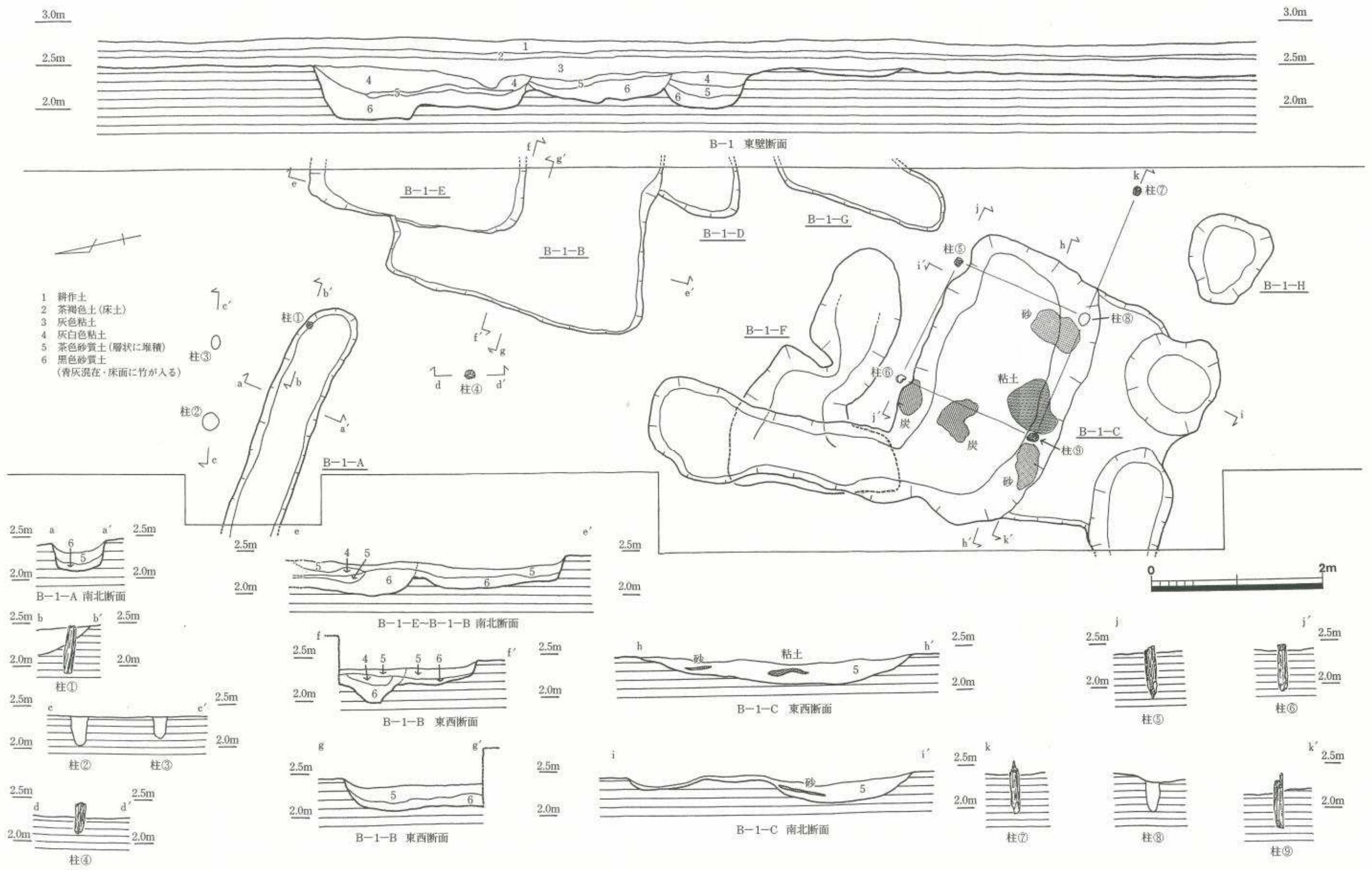
18点取上げた。土師質土器の胎土と同様の素材を焼成したもので、鍛冶に伴う炉体の材料かと思われる。形状は塊状のものなど破損しており、一定しない。

##### ⑨その他

資料として取り上げた中に、微細なシルト・砂の集積が認められた。

#### 4. B-1-D

東側部分は調査区外に及んでいる。隅丸方形を呈し、深さは45cmほどである。黒色土は15cmほど堆積している。茶色土はB-1-A・Bと同じく薄い層状を成している。平面及び断面から見て、B-1-Bに先行すると思われる。



第10図 B-1 鋳造関連土壤群実測図 (S-1/40)

### 出土遺物

6点と遺物の出土量は少ない。陶器は京風陶器(第18図7)が1点出土し、土師質土器はⅡa類が2点(第23図12、13)、その他に滑石粉末を混える鍛冶用の部材片かと推される資料(B-1-D20)がある。

### 5. B-1-E

東側は調査区外に及んでいる。平面形は隅丸方形で、主軸はB-1-Bよりも若干北に振っている。B-1-Bよりやや小さく、全長2.4m、深さ60cmである。B-1-Dと同様黒色土が厚く堆積している。また茶色土が層状に堆積するのも同様である。平面及び断面から見て、B-1-Bより後出する。

### 出土遺物

27点の出土があった。青花は大形鍔皿の見込部で花鳥文風の染付をする。一部に僅かな短沈線が看取される。他に波涛文を外面に染付した碗片がある。陶器は唐津系の壺(?)片と碗型で天目釉の掛かった口縁部細片がある。土師質土器はⅡ b類(第23図18)、木製品に糸車(第29図24)やモモ種子がある。動物遺存体には大形魚類の脊椎骨やヒト(?)大腿骨がある。

### 6. B-1-F・G・H

B-1-FはB-1-Cの北側に伸びた舌状部分の下部に潜っている。幅90cm、厚さ10cmほどの不定形な広がりを見せる。覆土は茶色土であるが、おがくず状の微細な木片はあまり目立たない。

B-1-Gは幅60cm、確認部分の長さ2mほどで覆土の厚さは10cmに満たない。

B-1-Hは80cm×1mほどの範囲で、B-1-Gと同じく覆土はごく浅い。

### 出土遺物

B-1-Fでは5点の出土があり、Ⅱ b類かと推される油芯が残る土師質土器細片、天草石製砥石2片、種子などが出土。

B-1-G・Hからも若干の遺物出土があったが、上記遺物と同じである。

## 第4節 廃棄壙(第12、14図・図版7)

D-2で検出された。西側が調査区外に及んでいるため、完掘はできなかったが、全長2.6m、深さ40cmほどの深い土壤である。標高は検出面で2.45mほどである。薄い炭化物の層があることや、B-1の土壤と同じく、何らかの機能性を示唆するような積極的な要素がないため、廃棄壙として扱った。

### 出土遺物

21点の出土をみた。他の遺構出土の遺物と同じ様相をみせる。

青花は森分類「大皿Ⅰa類」(第21図7)、「大皿Ⅱa類」(第21図4)と思われるものや、褐地白花碗(第22図33)といわれる特殊な資料がある。

陶器は唐津の碗底部と、縁なぶりの鉢、単純に外反する口縁作りの壺で胎土小豆色の施釉陶器

である。外国からの招来品と見られる。

瓦・瓦質土器では丸瓦、平瓦、火鉢、土鍋がみられる。

石製品では石質不明の仕上砥が1点出土。木器では什器、桶材、舟形製品(第29図18)がある。

この他に、D-2内の廃棄壙南側で石溜り様の集積が見られた。遺構としての認識はできないが渕土に本来含まれるはずのない河原石が若干集積していたため、周辺から出土した遺物を取上げたものである。

遺物は、青花で外面すべて無文、内面口縁部四方襷文で胴部無文の小野「碗E群」かと思われる資料、唐津系陶器、瓦質で3本、5本の擂目を疎に引く擂鉢、浅鉢形火鉢(第26図5と同一意匠・規格であるが別固体)、深鉢形火鉢(第26図2と同一意匠・規格であるが別固体)、片口付碾臼(第32図29)などあり、B-1~D-1溝と同時期の所産である。

## 第5節 杭列(第13図・図版8)

D-7で検出した。方位はおよそN-16°-Wで、旧地形の方位を示していると思われる。杭の頭部は標高2.5mで、3層の灰色粘土層の上面にある。先端部は4層の青灰色粘土層に達している。標高1.5mほどである。

## 第6節 柱列(第15図・図版7)

B-3~B-4にかけて検出された。柱の頭部は標高2.0mにある。柱①~④~⑩をつなぎ方位はN-26°-Wである。柱①③④⑥⑧⑩は六角形を呈し、他は円形である。いずれの柱も内側に向かって傾斜している。傾きは、柱①③で10°、柱②で15°である。柱①から③について、先端部を確認するべく掘り進めたが、思ったよりも深い位置まで達しており、軟弱な地盤のためこれ以上の作業は危険であるとの判断から、先端部まで達することはできなかった。確認したのは標高0mまでであった。

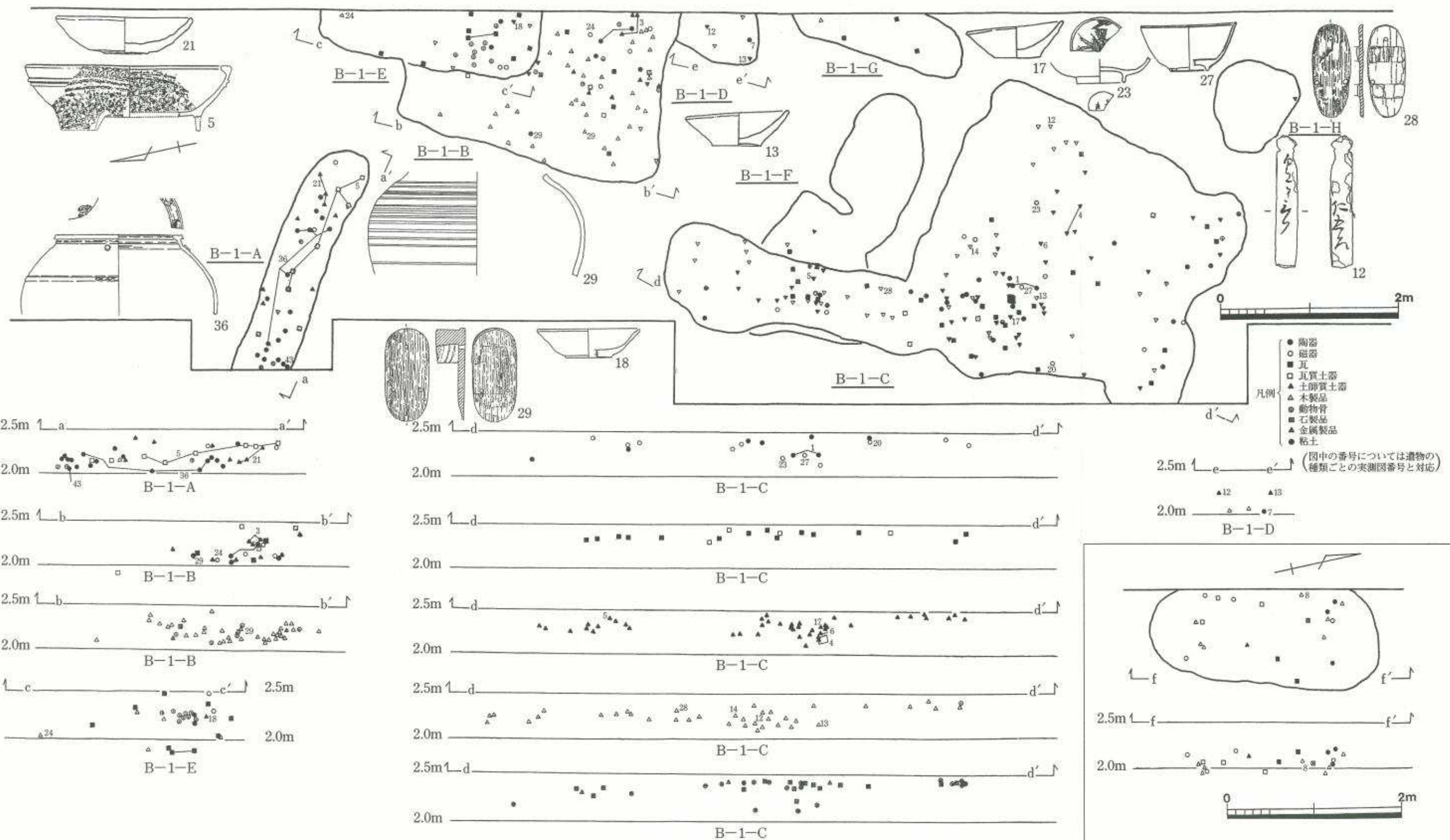
掘り方は不明瞭であったが、軟弱な地盤ということから考えると、掘り方は必要でなく、上部から押し込んだ可能性が強い。

傾斜していることから、建物に伴うものとは考えにくく、また、往時は多数の水路が巡っていたことを考えると、水路に伴う橋脚などの施設であろうと推測する。

註1 森毅 1992『難波宮址の研究 第9』(財团法人大阪市文化財協会)

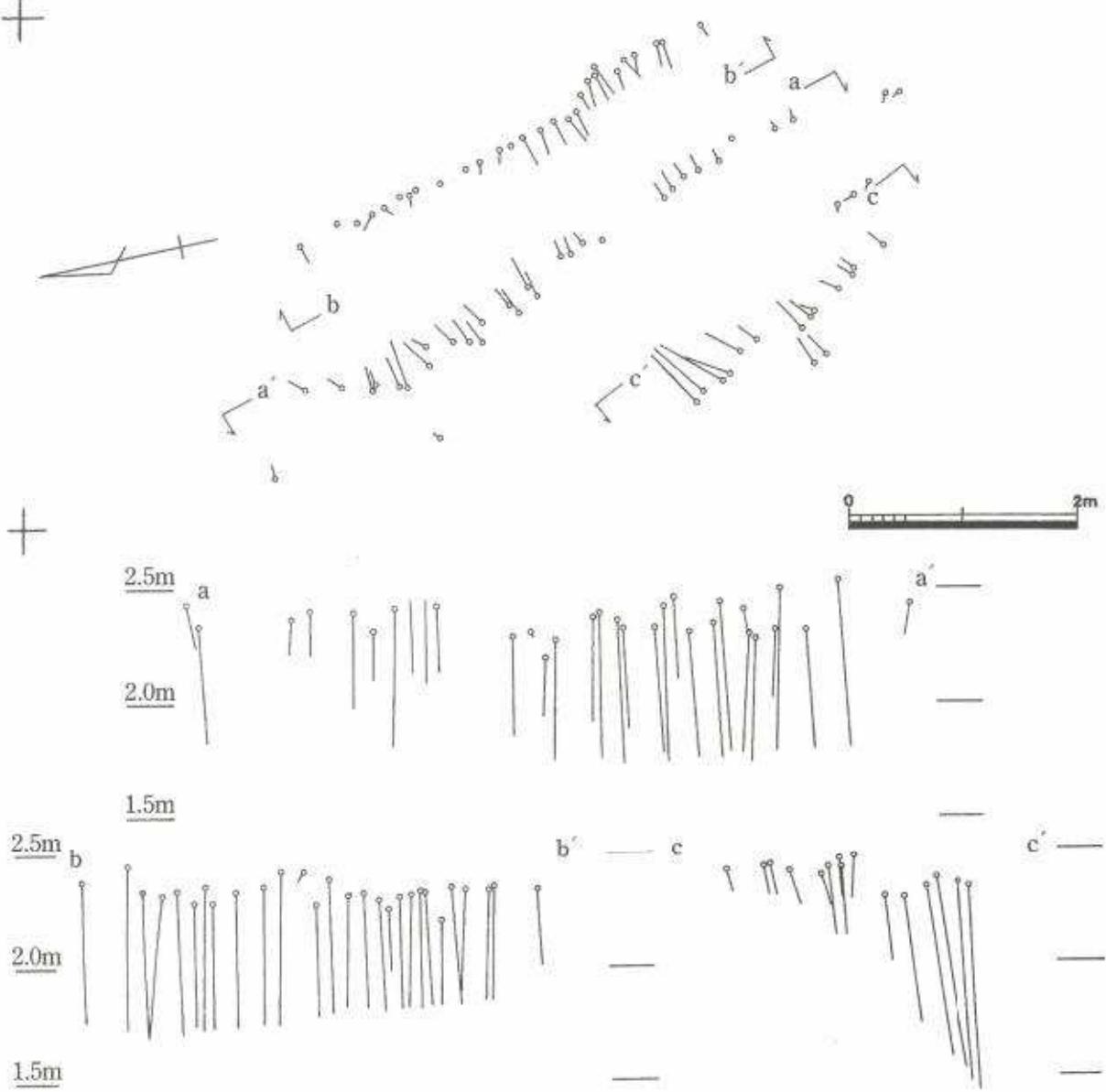
註2 加藤有重 1992『平戸和蘭商館跡の発掘Ⅲ』(平戸市の文化財34 平戸市教育委員会)

註3 小野正敏 1982『15~16世紀の染付碗、皿の分類と年代』『貿易陶磁研究No. 2』(日本貿易陶磁研究会)

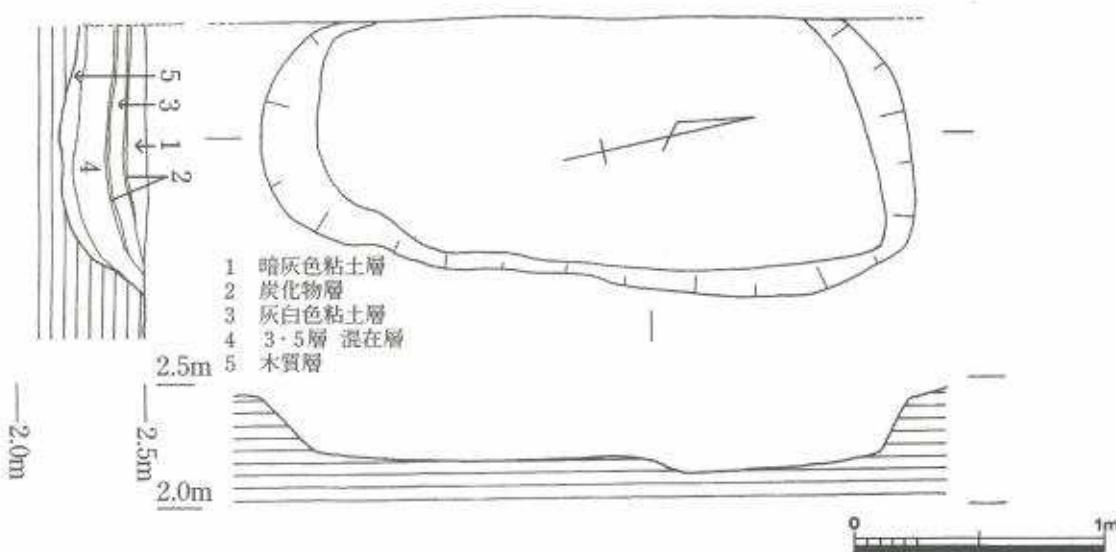


第11図 B-1 鋳造関連土壤群遺物出土状況図 (S-1/40)

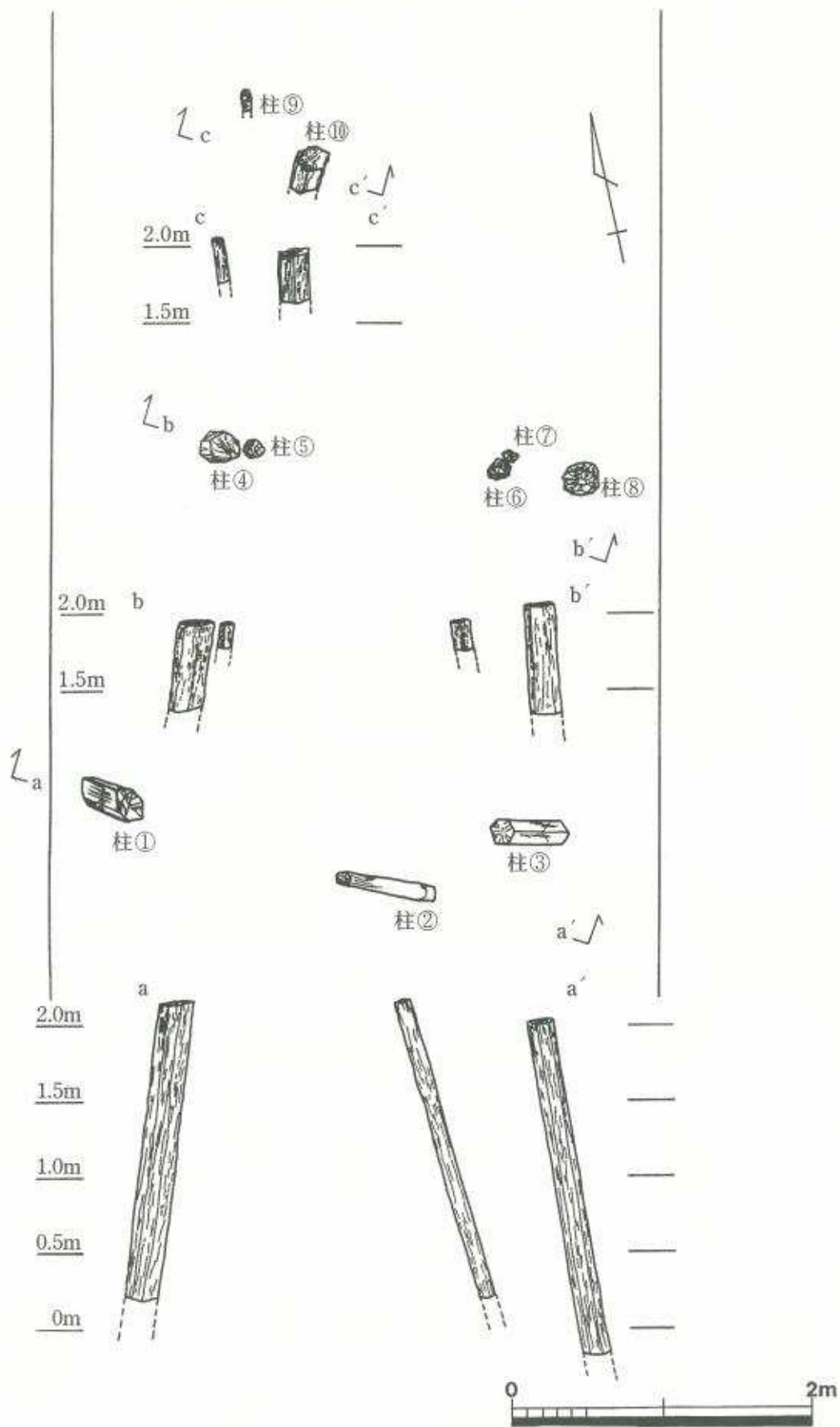
第12図 D-2 廃棄壙遺物出土状況図 (S-1/40)



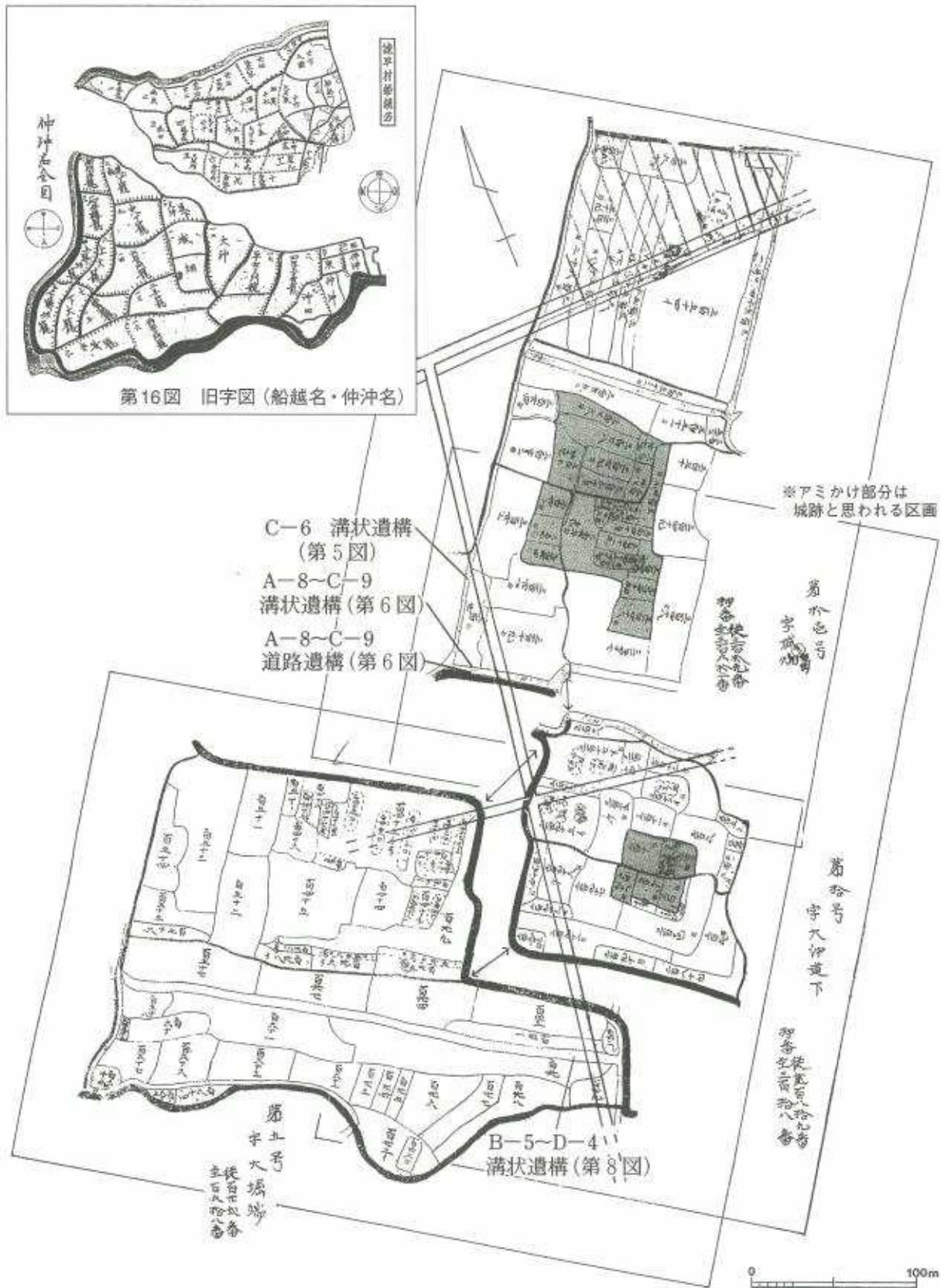
第13図 D-7 杭列模式図 (平面図S-1/60・断面図S-1/30)



第14図 D-2 廃棄壙実測図 (S-1/30)



第15図 B-3～B-4柱列実測図 (S-1/40)



第17図 旧字図（城畠・大沖道下・大堀端）と出土遺構の位置関係

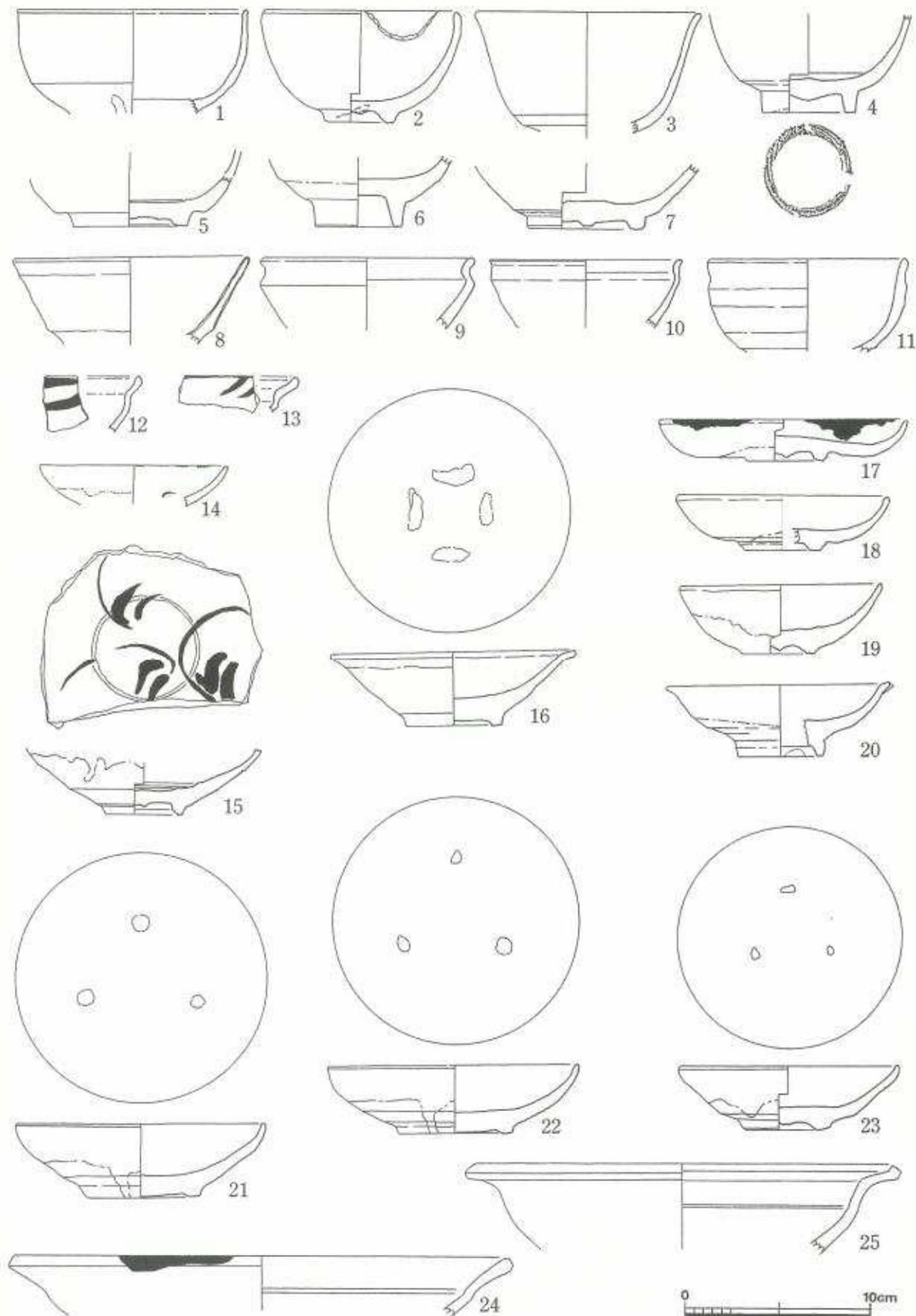
## 第三章 遺 物

### 1. 陶器（第18～20図、第5表、図版9）

調査区全体では2,198点の出土を見たが、図化できる資料が少なく、41点を図示している。掲載しなかった資料の中には、刷毛目技法を駆使した現川焼、銅緑釉を掛けた内野山製品、北武雄産の二彩唐津などが含まれる。その多くは包含層出土であり、遺構の時期等属性を有するものが僅少であるため、遺構出土の遺物を主に掲載した。また、遺物の配列は遺構毎でなく、またその説明は産地別ではなく、器種を主体に記述している。遺物個々のもつ属性である出土地点や法量・胎土・焼成などについては第5表を参照されたい。

#### 碗（1～11）

1は唐津系で高台脇から外上方に立ちあがって腰部を作り、さらに内湾気味に直行して体部を作る。器壁は薄く引き上げられ手持ちが軽い。2は高台脇から内湾気味に立ちあがる胴部に、つぼまり気味の口づくりをおこなった小振りの碗である。高台はケズリ出しており、高台内には兜布を残し、ちりめんじわを認める。口縁部の一部を打ち欠いてヘラなどの受け口部を作りだし、何かの用途を持った容器に転用している。また、見込み部に有機質の物質が遺存している。3は薄く高く外湾する体部に、口当たりのよい口縁部をもつ。高台部を欠損している。口径120mmほどの大ぶりのつくりで、大きさに比して薄く仕上げており、手に軽い。高台脇は2回のヘラケズリで仕上げ、体部と区分している。4は体部以下の資料で下半に重心がある。高台脇はヘラケズリを2回施し、高台内には兜布を残す。畳付には糸切り痕を留める。内底面はくぼませて見込み部を作りだし、真中が尖る特徴をもつ。ロクロの回転は時計回りである。5は高台脇のケズリ込みで体部を際立たせどっしりとした姿を見せる。高台内は2回のヘラケズリを施し、小さな兜巾を残す。内底面は2～3回のカンナでケズリ見込みを作る。一部にカンナの走った痕跡が見られる。釉薬は総掛して焼成し、後に畠付部を剥ぎ取っている。6も唐津と思われる高台部の資料である。上半部を欠損しているため詳細は不詳であるが、まず高台内をも含む全体に鉄釉と思われる鉛色に発色する釉薬を掛け、更に体部上半から内面にかけて灰釉をかけて焼成している。そのために体部外面上半から内面は釉薬が緑～黒変している。ケズリ出し高台で、高台内が高台脇より深くケズリ込む特徴を有し、また畠付は焼成前に釉薬を搔きとっている。畠付に砂床の砂付着。7は京焼風の碗底部の資料でケズリ出し高台、高台脇は1回ケズリを施し、この部位まで施釉している。高台内は中心部から外向きにカンナをかけている。そのため兜巾を残さない。施釉は内面見込部には行なわない。それは重ね焼きを行なうためであり、重ねの痕跡が看取される。丁寧な作りの資料である。8は志野風の碗で、高台部を欠損。見込部から体部の際は明確に腰折れしており、内面からこの部位まで白濁・失透気味の釉薬を厚く掛けている。9～11は天目茶碗である。いずれも底部を欠損している。9は直線的に立ち上がる体部に「く」字形に外反する口縁部を付している。10は9と合ひ似た形状を示す



第18図 陶器実測図① (S-1/3)

が口反りが強くなく、また小ぶりである。11はさらに口縁部の反りが不明瞭になった資料である。また胎土も白くザックリとし、手持ちも軽い。内面から外面体部上半まで天目釉を掛け、下半は露胎としている。

#### 向付（12、13）

絵唐津向付で、同一資料と思われる。体部から内湾気味に立ち上がる口縁を多角形に成形し、口縁内面に鉄砂で絵付けする。長石釉を施釉する。

#### 皿（14～23）

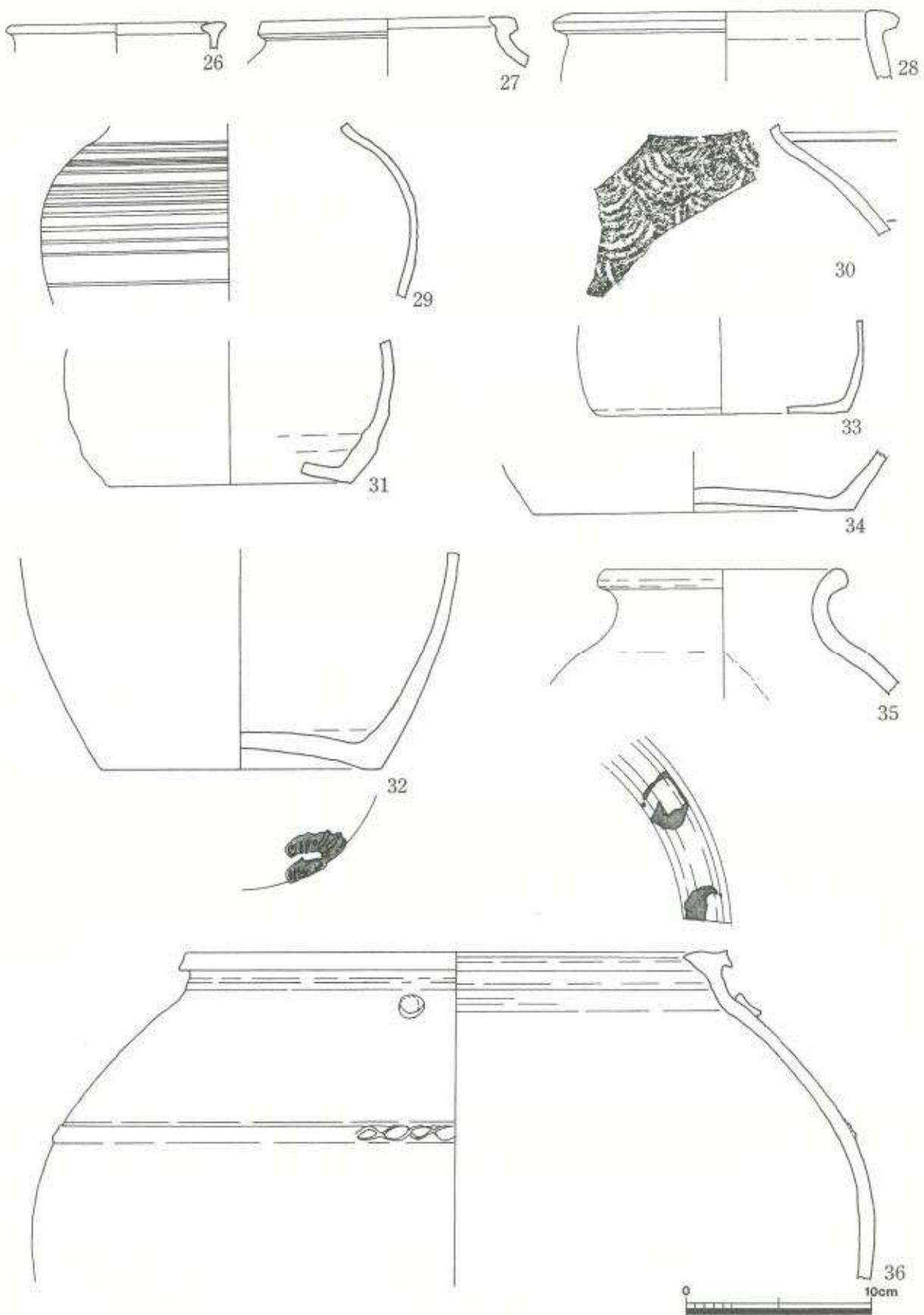
唐津の皿である。口縁部の形態により丸縁（14、17～19、21～23）と、折り縁（16）、端反りで縁なぶりかと思われるもの（20）がある。また鉄砂で皮鯨手（14、17）や、草花文（14）を描いた資料もある。釉薬は14が長石釉で他は灰釉である。窯詰は砂目（16）、胎土目（21～23）の2様がある。

#### 鉢（24、25）

唐津の鉢で、ともに内面体部との境に段を付けている。24は折り縁で皮鯨手、25は頸部を立上げ折り縁とし、口唇部を三角形状に引き上げ、立縁風にしている。

#### 壺（26～36）

26～28はT字形の口縁形態を示すもので、26は口縁上面がやや内傾する口づくりの資料で薄手である。27、28は相似た口縁部形状を見せる。27は内面の三角貼り付けが強いが、28は僅かに認めるに過ぎない。26は鉄釉を口縁部～外面に掛けている。27、28は内外面とともに長石釉を施釉しているが、十分に発色せず白濁色を呈している。28は重ね焼きの処理であろうか、溶着した部分を削りとっている。27は口縁部上面内側を5mm程度掻きとっている。29、30は肩部分の資料で29は14条の浅い沈線を全周させている。紐作りで非常に薄作りである。調整は叩き締めの後丁寧にナデ消している。内面に僅かに当て板の痕跡を認める。30は内面青海波の当て板による叩き作りで、外面にも僅かに叩き板の右上がりの短沈線が看取される。また内面頸部から上はナデ調整である。頸部と肩部外面に1条の沈線を全周させる。叩き締めの後ナデ消している。31は胴下半の資料で底部は上げ底になっている。叩き作りと思われるが痕跡は顕著でない。内面に火彫れが認められ、部分的に発泡している。底部を除いて総掛けしており、部分的に釉薬が弾けて鹿の子斑風にあがっている。底部底面に粉殻が付着している。32～34も底部の資料で、33は失透した灰釉の小形壺底部資料で、底部～外面は総掛けしている。胎土は小豆色を呈し良く焼き締まっている。底部底面に貝目痕を残す。32にも貝目痕を残す。35は釉薬を総掛けした葉茶壺口縁部資料で、頸部から単純に丸く外反した口作りを見せる。36は鉄釉を総掛けした葉茶壺で断面T字形のシャープな口作りをしている。頸部には鉗状の貼付をし、肩部には1条の突帯を貼し捻り文風に刺突している。口縁上面には重ね焼きのため貝目痕を2ヶ所



第19図 陶器実測図② (S-1/3)

に残す。

#### 擂鉢 (37、38)

ともに水挽き成形。37は内面口縁部から外面体部上半まで施釉。おろし目は10本1単位で疎に引いている。38は焼き締め風に焼きあがった資料であるが無釉かどうかは不明。底部は糸引き後碁笥底風に削り込む。おろし目は6本1単位である。

#### 甕 (39)

甕の資料と思われるもので、石英粒を多く含む底部資料である。釉薬は薄緑がかかった茶色で内外面とも掛かっている。信楽産かと思われる。

#### 水指 (40)

水挽き成形の底部資料で焼き締め陶で備前唐津である。外面に鉄釉5条の流し掛けを認め、これは底部下面まで及んでいる。糸引き離して、その後の造作は行わない。

#### こね鉢 (41、42)

内側に玉縁状に折返す口作りをした資料で、灰釉を総掛けしているが、溶けきらず白濁している。粘土紐巻き上げと思われ、叩き締めて仕上げている。その叩き痕跡が左上がりの短沈線として僅かに看取される。器壁に比べ底部を薄く仕上げている。焼成は伏せて行ったと見え、口唇部に僅かに貝目痕を残す。42は緑色に仕上がった資料で41よりさらに大きく、口作りも逆台形に造作するが、内面に段がつくクセは相似ている。

## 2. 磁器 (第21、22図、第6表、図版9)

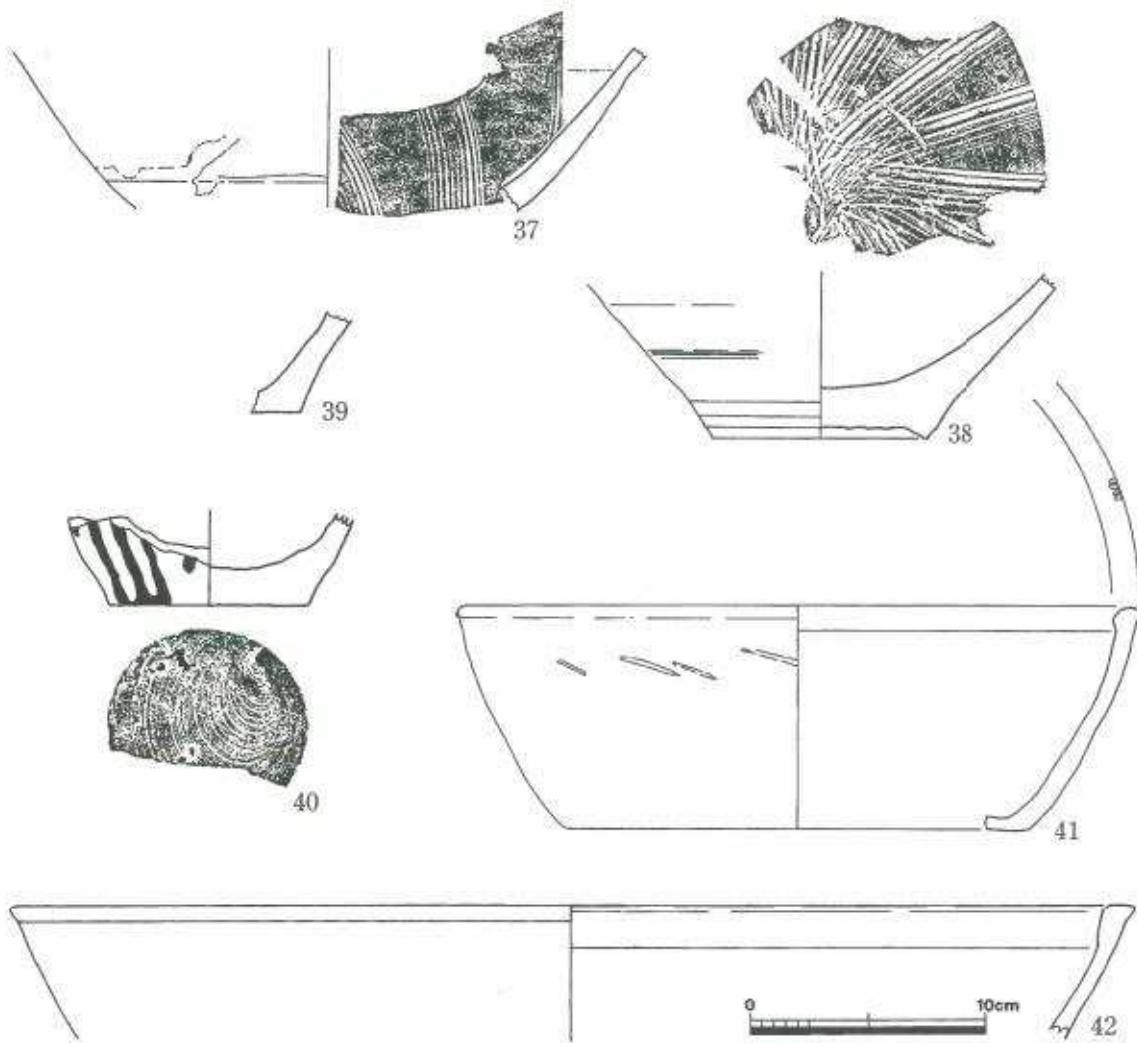
細片まで含めると1,478点の出土をみたが、図化できるものが少なく39点を図示した。資料の中には輸入された明時代の青花磁器が殆どを占めるが、白磁及び陽刻文をもつ白磁、緑・赤・青緑で彩色された大皿・皿など貴重な資料を認めることができる。陶器同様遺構出土の資料を中心に掲載したが、遺物によっては包含層出土の資料も掲載した。法量等は第6表を参照されたい。器種は皿類が多く、次いで碗類が多い傾向をもち、大形品は少ない。

#### 青花皿 (1~19)

1~3は体部から外反する口縁部をもつ中形の鎌皿で、口縁部には圈線間に窓を設け花卉文を染付、窓間の区画帯には外向の青海波文を充填している。外面は1~2条の匁線を全周させている。胴部無文。見込には二重圈線内に染付する。1は青色の発色が美しいが、2、3は少しくすんでいる。4は1~3をより大形にしたもので文様構成は同様である。ただ、大形である

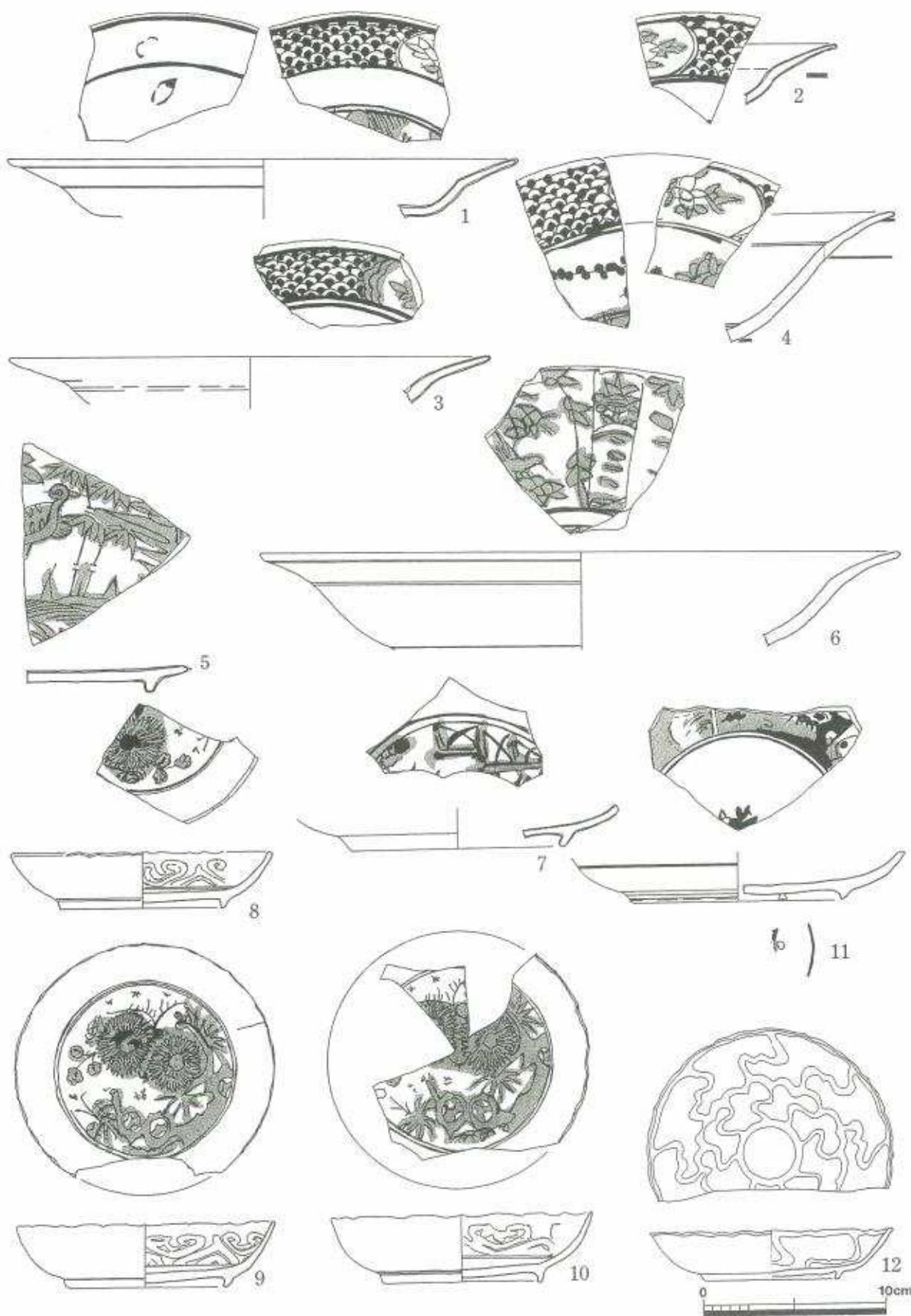
単位: cm

辨認番号	出土地点・番号	器形	口径	器高	臺面径	底径	腹径	胎土	焼成	輪	素	備考
18 1	B-1-C12+37	唐津碗	12.2	10.6	6	3.6			灰輪			口縁打欠き・兎金・ちりめんじわ
18 2	B4	唐津碗	12	6.5		5			灰輪			木挽痕
18 3	D1溝12	唐津碗				6			灰輪			兎金・置付系さり
18 4	D1溝12	唐津碗				6			灰輪			墨付焼成後神ハギ・兎金(小)・カンナかけ
18 5	B3柱2	碗				4.6			輪輪・灰輪			妙味妙付着・置付焼成前神ハギ
18 6	表採	唐津碗		1.7					木灰(ビワ色～薄緑)			重ね焼き痕跡あり
18 7	B-1-D33	京風碗	12.6	4.7	6.4				鐵軸			外反口縁
18 8	B1溝9	志野碗	12.6	4.7	6.4				灰輪			端反り
18 9	D1溝3	天目碗	11.6	3.9					鐵軸			
18 10	B1溝上	天目碗	10.2	3.7					長石輪			
18 11	B3Ⅲ	天目碗	10.8	5					長石輪			
18 12	B1溝10	絵唐津向付							長石輪			
18 13	B1溝6	絵唐津向付							木灰輪			
18 14	B1溝35	絵唐津皿	10			4.2			皮輪手			
18 15	D1溝壁	絵唐津皿		13	4.1	5			兜・見込二段・秋草文			
18 16	A9Ⅱ	唐津皿		13	4.1	5			新縁・糸目			
18 17	D2Ⅲ	唐津皿	13.2	2.2	4.2				皮輪・兎金・ちりめんじわ・トチソ痕			
18 18	A8	唐津皿	11.4	2.9	4.2				皮輪(縁)			
18 19	B1溝21	唐津皿	11	3.7	4				灰輪(縁)			
18 20	B1溝33	唐津皿	12.2	3.9	4.6				長石輪			兎金・一部白濁
18 21	D1溝8+14+19+21	唐津丸縁皿	13.4	4	6.2				灰輪			胎土目・13と同一窓
18 22	D1溝9	唐津丸縁皿	13.4	3.7	6				灰輪			胎土目・14と同一窓
18 23	D1溝20	唐津丸縁皿	11.8	3.4	5				灰輪(縁)			兎金・胎土目
18 24	D2石だまり	唐津钵	27	3.2					皮輪折縁			
18 25	A8	唐津钵	23	5					立縁口縁			
19 26	D7Ⅱ	唐津系蓋	11.8									
19 27	B1溝7	唐津蓋	13.6									
19 28	D2Ⅱ	唐津系蓋	18.6									
19 29	B-1-B7+29+30+31	唐津系蓋										
19 30	B1溝8	唐津蓋										
19 31	B1溝上	唐津系蓋										
19 32	D2石だまり	唐津系蓋										
19 33	D2Ⅱ	唐津系蓋										
19 34	B1溝22+38	唐津系蓋										
19 35	B3Ⅱ+D2Ⅲ	唐津系蓋	13.6									
19 36	B-1-A8+11+12+14+17+18	唐津系蓋	2.9									
20 37	B1溝34	唐津系蓋										
20 38	B1溝18	唐津系蓋										
20 39	B1溝内	信楽 (?) 蔵										
20 40	A8	唐津水指										
20 41	B3Ⅲ	唐津系こね鉢	29	9.4								
20 42	B-1-A19	唐津系こね鉢	49.6									



第20図 陶器実測図③ (S-1/3)

ためか胴部にも花卉文を配している。5、6は胎土から同一の資料と思われるもので芙蓉手大型の皿である。一重の窓内には花卉文・亀文・鳥文を染付し、窓間を花卉文と珠繋ぎ状の環珞文で繋いでいる。見込圈線内には竹文・鳥文などを染付する。主文様は口縁部・見込とともに文様型を線描きしたと思われ、浅い僅かな線状痕が認められる。高台内に釉薬が僅かに掛かるが、本来は無釉と思われる。また置付には砂が熔着している。7は二重圈線内に垣文風の文様を配したもので、置付を除いて青磁風釉を総掛けしている。高台は内傾するようにケズリこみ、カシナ目を残す。8~10は同形・同巧・同意匠の輪花形皿で型打ち成形によって内向・外向の如意頭文を陽刻している。口唇部は輪花形に整形。内面は二重圈線で見込を画し、樹石文・蝶文・花卉文を染付する。外面は高台脇に二重圈線を全周させる。釉薬は青みがかった透明釉を置付を除いて施釉。13、14は同形・同巧・同意匠の資料で径12cm程度の小振りの皿である。内面口縁には四方襍文を圈線で囲って全周させ、一重圈線内の見込には花卉文を染付ける。外面は二段に圈線を入れている。透明釉を総掛けしており、置付から一部高台内に砂が熔着している。器表には細かな嵌入が認められる。15は円縁の皿で、口縁部内外に圈線を引き、二重圈線で画



第21図 磁器実測図① (S-1/3)